

記紀ききの男をのこと女をみな

― 恋のはじまり ―

一、 狹穂姫と狹穂彦王

謀反とされた兄と妹の恋

二、 雌鳥皇女と隼別皇子

不倫、反逆とされた恋

三、 磐之媛命

嫉妬深いとされた皇后の傷ついた恋心

四、 木梨輕太子と輕大郎女

禁断とされた兄弟姉妹の恋の行方

五、 穴穂天皇と中蒂姫

封印された恋

「こひ」は「こふ」の名詞。万葉仮名では、孤悲、故非と表記される。

恋の本字は戀、**戀** と心からなる。**戀** は言の両側に糸を飾りつけたもので、

言を神に誓約し、違はぬこと。一心にそうする。まさに、一途に恋ふ。

その情こころは皇位をゆるがすものとしてあらはれた。

一、狭穂姫と狭穂彦王

狭穂姫は活目入彦五十狭茅天皇（垂仁天皇）の皇后であるが、この天皇は七后から男王十三、女王三を得るといふ婚姻政策をとっておられる。狭穂姫は、稚日本根子彦大日日天皇（開化天皇）と和珥臣の遠祖、姥津命の妹、姥津媛の子、彦坐王の女であり、正統といふか、なるべくしてなられた姫である。即位の三年に、新羅王の子、天日槍が来朝し、葉細珠、足高珠、鶉鹿鹿赤石珠、出石刀子、出石槍、日鏡、熊神籬、膽狭浅大刀を齎し、たいそう賑やかなことであつたらう。ところがどうしたことか、四年秋九月に皇后の母兄（母を同じくする兄）の狭穂彦王が謀反をおこしたといふ¹。

書紀の伝へるところでは、四年（BC26）の秋九月、狭穂彦王が皇后の私邸を訪れ、天皇と私とどちらを愛しむのか？と問はれ、軽い気持ちで本心を明かされ、兄王と告げられたことにはじまる。狭穂彦王からすれば、今の天下では美人が沢山おり（よほど豊かになり、化粧や衣裳に気が回るようにでもなつたといはんばかり）、活目入彦五十狭茅天皇の情が皇后から離れてゆくことは充分予想が出来た（天皇は後に次々と后を求められる）。私をえらぶなら、天皇を殺しておくれ、そうすれば、枕を高くして生涯を過ごすことができる、懐にしのばせる小刀を皇后に渡されたといふ。

<p>開化天皇 — 崇神天皇 — 垂仁天皇 9代 10代 11代</p>
<p>稚日本根子彦大日日天皇（開化天皇）</p> <p>└ 彦坐王</p> <p>姥津媛（和珥臣の遠祖、姥津命の妹）</p>
<p>彦坐王</p> <ul style="list-style-type: none"> └ 狭穂彦王（沙本毘古王） └ 狭穂姫命（沙本毘売之命） └ 沙本之大闇見戸売（春日建国勝戸売の女） └ 山代之大筒木真若王（神功皇后の祖） └ 袁祁都比売命（彦姥津命の妹） └ 丹波道主王（旦波比古多多須美知能宇斯王） └ 日葉酢媛命（後に垂仁天皇の皇后） └ 息長水依比売
<p>活目入彦五十狭茅天皇（垂仁天皇）</p> <p>└ 譽津別命</p> <p>狭穂姫</p>

ちよつと待ってください、なにかひどい仕打ちでもあつたのですか？あまりに短絡、唐

突、と読者の方がうろたへる。

狭穂彦王の父は彦坐王、その先祖となる和珥臣の遠祖、彦國葺は、かつて和珥坂で、童女みまきいりびこが御間城入彦（崇神天皇）に武埴安彦とその妻、吾田媛の謀反を歌でほめかけたとき、おほひこのみこと大彦命とともにそれを鎮圧し、彦坐王の子、丹波道主命たにはのちぬしのみことあるいは彦坐王自身（古事記）が丹波を平定するといふ働きをした人物である。天日槍の帰化に關しても和珥系は重要な役割を果しており、和珥系が天皇家を篡奪するような動機は見ひ出せない。「兄か夫か」という選択、「色衰へて寵緩む。豈に永に色を恃むこと得むか。」といふ動機は、一族を鼓舞し政權を奪取するような動機とはほど遠い。

ただ天日槍の携えてきた神寶かむたからに關して、出雲の神寶の争奪でみられたごとく、悶着があったものと思はれる。本来ならば、活目入彦五十狹茅天皇（垂仁天皇）に献上されてしかるべきものであろうが、「但馬國に藏めて、常に神の物と爲す。」と、出石神社に奉納されたのであるが、後（垂仁天皇八十八年）に召し上げられ石上神宮に藏されたようである。また、出石神社の宮家も、倭國魂神やまとくにたまのかみを祭る長尾市の末裔が司ることになる。天日槍が、半島に於ける「天より来る王による建国神話」を持ち込むのではないかと、「渡の神、塞へて入れざりき。」と、その警戒心を古事記が伝へている。渡の神とは和多志の大神、大山祇神、垂仁政權は國神としての祭祀を求めたものと思はれ、「祭られているのは天日槍が将来した八種の神宝でこれを出石八前大神とし、天日槍命を併せ祀る。」と日本風に落ち着くのであるが、そうすんなり受容されたものではあるまい。しかし、これが深刻な問題となった形跡はない。

この族は、土地に根をはり、息長帯比賣命（神功皇后）を輩出し、政治力を發揮することになる。当時にあつては技術力もあり開明的な息吹をもたらした集団であり、この二人が謀反に傾くといふのは、政治的な脈絡ではどうもありえないことと思はれる。

五年の冬十月といふから一年が過ぎて、天皇、皇后共に來目の高宮たかみやに行幸された時に事件が発覚したとする。皇后は思ひ患ひ、むなしく時をすごされたのであろう、天皇がわが膝を枕として昼寝されている。「この今がまさにその時」と思ふと涙があふれ、天皇の顔に落ちた。

天皇はその涙で夢から寤められた。周礼、占夢に寤夢ごむがあり、昼のできことを夢に見ることといふ、「夢は人の精神の寤むるところ、占ふべきものなり。」とされ、その夢の内容を告

げられた皇后は愕然とされた。「錦色なる小蛇、朕が頸に繞る。復、大雨、狹穂より發り来て面を濡す。是は何の祥ならむ。」と問はれ、皇后は、「錦色なる小蛇は、妾に（兄王が）授けたる匕首（短劍）なり。大雨の忽に發るは、妾が眼涙なり。」と地に伏してもうされた。

この一年、兄の志と天皇の恩に引き裂かれた心は、伏してはむせび、仰ぎてはむせび、手をそめんとし血泣ち、手がだせず血泣ち、人にあかすことならず、今日、膝の天皇の顔にこぼれ落ちた。天皇は皇后の罪に非ずと慰められる一方、すぐさま近辺の八綱田に狹穂彦を撃たしめた。かほどの嘆きゆえ、狹穂彦の胸もうづいたのであるうか、守りを固めていた。冬十月、刈り取られていた稲で城を築いたという。十一月になっても、降伏しなかつたといふから、突発的事件とはいへまい。目立ってはいけませんが、皇后が天皇を手にかけて際には速やかに宮を占拠する準備はなされていたのであろうか、ならば謀反である。皇后の周辺にも異変を告げる手のものが配されていたと考へるべきであらう。その手の者が皇后とその御子、譽津別命を城へと導いていた。皇后は、兄の助命をはかるためうされたが、御子がおられるといふに、八綱田は大胆にも稲城に火を放つ。皇后は、兄の助命はかなわぬことと悟り、御子を抱きかかえて外に出すも、兄を売り渡したとなれば、何の面目あつて生きてゆけようや？と、兄とともに火の中にとどまられ、おなくなりになられた。

これでは謀反の呈をなしていない。何よりも皇位を篡奪するといふ意志が感ぜられない。兄を慕っていた狹穂姫を無理に活目入彦五十狹茅天皇が娶られたことが原因であらうか？本来は彦坐王を通じて、和珥系との連携を固める狙いであったが、裏目にてしまったように思はれる。狹穂姫はそのことが分つたのであろう、「志並びに貞潔し」丹波道主王の女五婦を後宮に推薦して兄に殉じた。しかし、その子、譽津別命の心に言葉にならぬ憂ひを負はせ、三十歳にして物言はずして引き籠もる苦悩を味はれることとなる。謀反とされた事件であるが、本当に狹穂彦は懷刀を妹に渡しておられたのであろうか？狹穂姫の哀しみと妹を守らむとして謀反にはまりこむも顧みぬ狹穂彦の男気が、そこはかとなく漂ってくる。はじめから、狹穂姫をはずして丹波の五婦を求めておられれば、かくなる事件は起こりうべくもなかつたろうに…天皇もさぞお悩みになられたことであらう。

では古事記はこの事件をどう伝へていようか。狹穂姫は沙本毘賣、狹穂彦王は沙本毘古王となる。天皇と沙本毘賣の婚儀が整ったときに、兄は妹に本当は兄と夫とどちらが愛しい

のか、そのところを確認された。すると毘賣は兄であるといふ。ならば、二人して天下を治めるしかあるまい、と毘賣に短剣を渡し、眠られたときに刺し殺すよう申された。書紀はそこから一年を経るのであるが、古事記ではそのような時の経過はない。膝枕でお眠りになる天皇に、三度短剣をふるおうとされたが、哀しみの情から天皇のお顔を涙で濡らしてしまはれた。

ここからの展開は書紀と同じで、天皇は軍を沙本毘古王に差し向けられ、沙本毘古王は稲城でこれを待っておられたとあり、準備はできていた。ここから古事記の展開は違ってくる。毘賣は兄に会ひたくて後門から逃れ、兄の待つ稲城にお入りになられた。このとき、毘賣が懐妊されていたことが分かり、その御子もさることながら、三年間愛しく思つてこられた毘賣でもあり、天皇は攻めることを控へられた。三年間愛しくとあらば、結婚する前からすでにご関係を深めておられたことになる。毘賣は御子をお産みになると、もし天皇が我が子とおぼされるなら納めたまへ、と城の外にお出しになられた。天皇は御子も毘賣も取り戻したく、屈強の者、俊敏の者を選び、毘賣が御子をお渡しになるとき、二人共々連れ戻すよう命じられた。

毘賣はそれを察知しておられ、あらかじめ髪を落として頭にかぶり、手に纏いた玉の紐を腐らせ、衣服も酒でふやかせ、御子を抱いてお出ましになられると、屈強の者、俊敏の者が髪をつかめば頭から離れ、玉をつかめば手から剥がれ、衣服を掴めば破れ、毘賣を連れ戻すことはかなはなかつた。天皇はあきらめきれず、御子の名は母がつけるものと、詔されると、毘賣は、「火中で生れましき」、「ほむちわけ（本牟智和氣）と称すべし」とお答へになられたが、お戻りになることはなかつた。更に、天皇が、だれが育てるといふのか、と詔されると、乳母と湯坐（湯を浴びせる人）をおとりになるがよろしいと申された。天皇は、貴方が堅くしぼってくれたままの小佩を、だれに解かしむというか？貴方に再び解いてもらいたいと、最後のカードを切られたのであるが、旦波の比古多須美智の宇斯の王の二人の女をお使ひになるがよろしいとされ、兄に従ひ命を絶たれた。

既に書紀でみた譽津別王は、火の中で生まれたという古事記の記述を否定している。古事記を読んだ人は、当然、赤子を想像するが、書紀では、即位の七年前の生まれ、結婚時は八歳、火の中にいた時には十一歳の少年となる。狭穗姫は活目入彦五十狭茅天皇の皇太子時代に、すでにその子を生んでおられたとする。天皇か兄か迫られた狭穗姫の苦悩とは何なのか？古事記においては、三年の関係をへての婚儀に際しての確認であり、迫られた

選択もわからないではない。書紀においてはすっかり結婚生活が定着しており、今更一体なにが引き金となり、その選択に苦悩せざるを得ないのか、さっぱりわからない。あたまから謀反と書き出され、天皇を殺すとあれば、謀反であろうが、政治的動機も定かでない。あたまから狭穂姫が夫より兄を愛しておられた、このことだけが確かなことのようにである。

哀れなのは御子、譽津別王である。「八掬髻やつかひげむすにして猶、泣いさつること兒わかこのごとし。」とある。これは書紀卷一の「この時、素戔嗚尊すさのをのみことは年すでに長じ、八握髻やつかひげ（足にとどくほどの髻）をはやしていたが天下を治めず、常に啼泣なきいさち、悲恨ふつくんだ。伊奘諾尊いざなぎのみことが何故いつもかく泣くのかと問ふと、根の国の母に従ひただ泣つるのみと対こたへた。」を想起せしめる。母、狭穂姫に従ひただ泣つるのみ。言ふを「まこととふ」と訓じている。「とふ」とは声を出して物をいうこと。本当のことが声にならず泣くしかできぬ。天皇はさような三十歳の御子を疎まれることなく、近くに侍らせて来られた。天皇も苦悩された。譽津別王は、鶺鴒くぐい（鳴き声から来ており白鳥とされる）をご覧になったとき、これは何かとおおせになった。言ふであるが、「あぎとふ」と訓じ、アギは口あるいは脰がく、口を開けて声を出すこと。白鳥を見上げて声が出た。亡き母、狭穂姫を感じられたのであろうか。この白鳥は出雲で捕獲された、出雲は根の国、黄泉への入口でもあった。また、素戔嗚尊、大国主神の地であり、これらの神のおもんばかり慮が働いていると恐れられたものかもしれない。後に、お亡くなりになった日本武尊やまとたけるのみことが白鳥となって飛び立たれることに通じよう。これを追って捕獲したのが天湯河板あめのゆかはたな擧、鳥取部の祖である。鳥養部、譽津部ともされる。「譽津別命、是の鶺鴒を弄びて、遂に言語ふことを得つ。」この鶺鴒と遊ぶことでやっと物言ふことができるようになられたと伝へている。

王権が形成されるようになると、婚姻は勢力を拡大する上で重要な役割を持つのであるが、後に、豪族が舍人とねりとして男を近習としたごとく、采女うねめとして女を宮中むすめにいれるようになる。恋愛の情こころが一気に芽吹くことになる。その手前の世であるが、國を形成してゆく上でさまざまな能力が開発されたのは男ばかりではなかったようである。女としての容姿はもとより、情こころをはぐくむことが求められてきた。狭穂姫はこの修羅場にあっても、兄にも天皇にも配慮ができ、周到な用意をして御子のみ天皇に送りとどけておられる。男と女の関係も一筋縄ではゆかなくなってきたようである。天皇とすでに関係をもたれ、或はすでに子をもうけておられ、それを断つてまでもとの男のところに戻る。そういうことは起こり難いことであるが、それが起こる世が訪れた。それが兄であったといふは、高貴な

血をまもるといふことで兄弟姉妹の間の世継ぎが行はれた伝統があり、強い絆が残っていたのかもしれない。漢書、羌肱伝きやうこうに、「兄弟相戀あい（恋）」といふ。まして兄妹をや。ここには近親相姦という批判はみられない。「あなうれしゑや、うましをとこ（美少年）に遭へて」と、先に声をおかけになられたのも、泉津平坂（黄泉との境）で伊弉諾尊と対峙し、「事戸ことどを渡す（妻の誓を絶つ）」と先手をうたれたのも、伊弉冉尊いざなみのみこと（女神妻）であった。ここでも、既成事実をどんどん重ねてゆかれるのは、狹穗姫（妻）であった。兄を突破口にして、その恋心を解き放たれた。七后から男王十三、女王三を得られた活目入彦五十狹茅天皇（垂仁天皇）の古事記における狹穗姫への執着ぶりをみれば、人の心を捉へて離さぬ姫の気持ちの強さが知られる。兄を恋しておられ、それは天皇といへども、いかんともすることがおできにならない。土壇場においても、もとのさやに戻そうとされたがどうにもならなかった。天皇は、二人を殺してしまはれた。書紀は、狹穗彦王が皇位に登るために、狹穗姫をそそのかせて天皇を殺させようとしたとするが、たとへ成功したとしても、皇位継承権は崇神天皇の皇子が優先し、狹穗彦王が皇位につくには更なる戦いを制する必要がある不確定すぎる。おそらく、狹穗姫の安全を確保することもむつかしがる。逆に、自らを危機においやるだけではあるまいか？それほど愚かに皇位に就けると考へたとは思はれぬ。天皇が二人を殺さしめたことを正当化するために、流布された噂とみるべきではないか？ 狹穗姫の恋は、皇后であることをつきやぶる一途さとなった。天皇の権威をゆるがせにするものであり、謀反とされたのであろうか。

許されぬ恋に身を焦がす女が現はれると同じく、その情こころを受け止めて滅びる男も現はれた。しかし、この場合、子供にしわ寄せがゆくことは、古今変はりはない。そういふ世が生まれ、そこに破滅された二人である。しかし、そういふ二人として平成の世にまで語りつがれようとは、夢思ひ及ばれなかったことであらう。

1. 四年の秋九月の丙戌の朔戊申(BC26.09.23)に、皇后の母兄、狹穂彦王、謀反りて、社稷を危めむとす。因りて、皇后の燕居すを伺ひて、これに語りて曰はく、「汝、兄と夫と孰か愛しき。」是に、皇后、問ふ意趣を知しめさずして、輒ち對へて曰はく、「兄ぞ愛しき。」則ち皇后に詔へて曰はく、「夫れ、色を以て人に事ふるは、色衰へて寵緩む。今、天下に佳人多なり。各遞に進みて寵を求む。豈に永に色を恃まむこと得むか。是を以て冀はくは、吾、鴻祚登らさば、必ず汝と天下に照臨まむ。則ち枕を高くして永に百年を終へむこと、快からざらむか。願はくは我が爲に天皇を殺しまつれ。」仍りて、七首を取りて、皇后に授けて曰はく、「是の七首を柵の中に佩びて、天皇の寝ませらむときに、廻ち頸を刺して殺せまつれ。」皇后、是に、心の裏に兢ち戦きて所如を知らず。然れども、兄の王の志を視るに、便く諫むること得まじ。故、其の七首を受りて、獨え藏すまじみ、衣の中に著けり。遂に兄を諫むる情有すか。(書紀、卷六、垂仁天皇 岩波文庫)

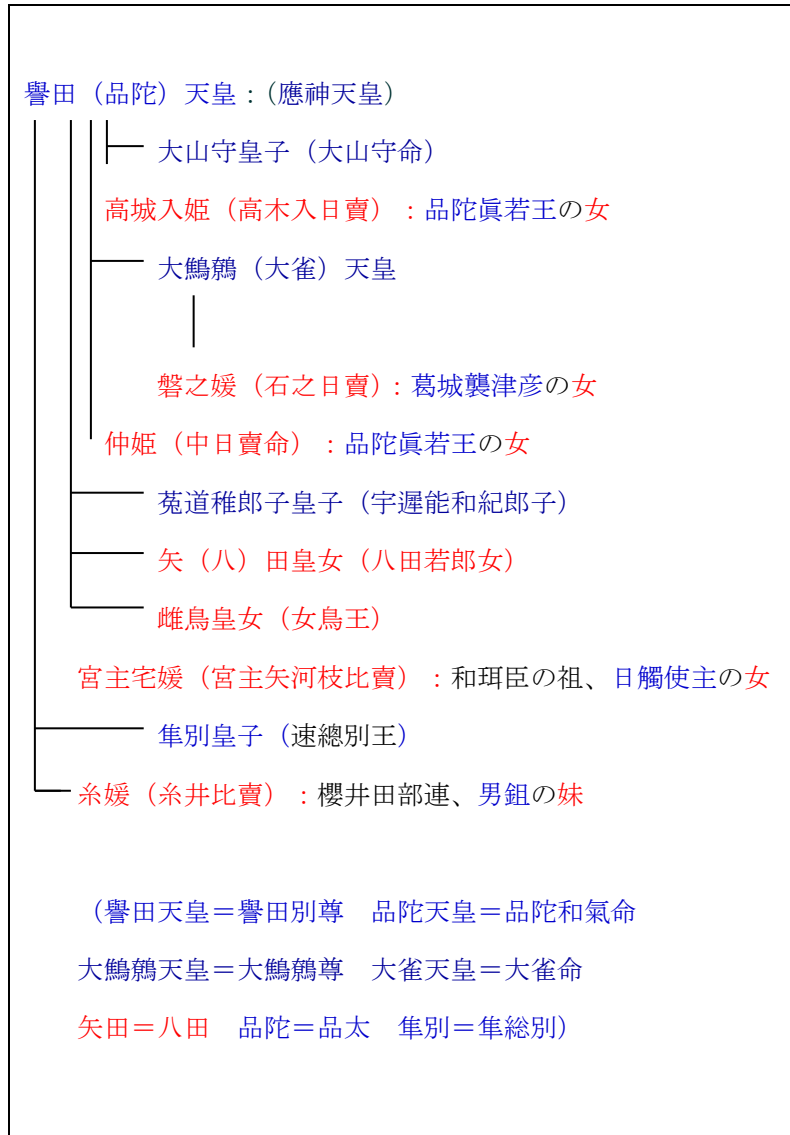
2. 五年の冬十月の己卯の朔(BC25.10)に、天皇、來目に幸して、高宮に居す。時に、天皇、皇后の膝に枕して晝寝す。是に、皇后、既に事を成げることなし。而して空しくこれを思ふ。兄王の謀く所は、適是時なるにと。即ち眼淚流りて帝の面に落つ。天皇、則ちこれに寤きて、皇后に語りて曰はく、「朕、今日夢みむ。錦色なる小蛇、朕が頸に繞る。復、大雨、狹穂より發り來て面を濡す。是は何の祥ならむ。」皇后、則ち謀をえ匿すまじきことを知りて、悚ち恐りて地に伏して、曲に兄王の反状を上す。因りて以て奏して曰す。「妾、兄の王の志に違ふこと能ず。亦、天皇の恩に背くことを得ず。告言さば兄の王を亡してむ。言さずば社稷を傾けてむ。是を以て、一たびは以て懼り、一たびは以て悲ぶ。俯し仰ぎて喉咽び、進退ひて血泣つ。日に夜に懷怛りて、え訴言すまじ。唯、今日は、天皇、妾が膝に枕して寝ませり。是に、妾、一たび思へらく、若し狂へる婦有りて、兄の志を成すは、適遇是時に、勞かずして功を成げむか。茲の意、未だ竟へざるに、眼淚自づから流る。袖を擧げて涕を拭ふに、袖より溢りて帝面を沾しつ。故、今日の夢は、必ずや是の事の應ならむ。錦色なる小蛇は、妾に授けたる七首なり。大雨の忽に發るは、妾が眼淚なり。」天皇、皇后に謂りて曰はく、「是は汝が罪に非らず。」即ち近き縣の卒を發して、上毛野君の遠祖、八綱田に命せて、狹穂彦を撃しむ。時に、狹穂彦、師を與してこれを距む。忽に稻を積みて城を作る。其れ堅くして破るべからず。此を稻城と謂ふなり。月を踰へて降す。是に、皇后、これを悲びて曰はく、「吾、皇后と雖も、既に兄王を亡ひては、何の面目を以て、天下に莅まむや。」則ち王子、譽津別命を抱きて、兄の王

王を撃ちたまひし時、その王、稻城を作りて待ち戦ひき。この時、沙本毘賣の命、その兄に得忍びずて、後つ門より逃げ出でて、その稻城に納りましき。この時、その後妊身ませり。ここに天皇、その後の懐妊ませること、また愛で重みしたまふこと三年に至りぬるに忍びたまはざりき。故、その軍を廻して、急に攻迫めたまはざりき。かく逗留れる間に、その妊ませる御子既に産れましつ。故、その御子を出だして、稻城の外に置きて、天皇に白さしめたまひつらへ、「もしこの御子を、天皇の御子と思ほしめさば、治めたまふべし。」とまをさしめたまひき。ここに天皇詔りたまひしく、「その兄を怨みつれども、なほその后を愛しむに得忍びず。」とのりたまひき。故、すなはち后を得たまはむ心ありき。ここをもちて軍士の中に力士の軽く捷きを選び聚めて、宣りたまひしく、「その御子を取らむ時、すなはちその母王を掠ひ取れ。髪にもあれ手にもあれ、取り獲む隨に掬みて控き出すべし。」とのりたまひき。ここにその後、豫てその情を知らしめして、悉にその髪を剃り、髪もちてその頭を覆い、また玉の緒を腐して、三重に手に纏かし、また、酒もちて御衣を腐し、全き衣の如く服しき。かく設け備へて、その御子を抱きて、城の外にさし出したまひき。ここにその力士等、その御子を取りて、すなはちその御祖を握りき。ここにその御髪を握らば、御髪自ら落ち、その御手を握れば、玉の緒また絶え、其の御衣を握れば、御衣すなはち破れつ。ここをもちてその御子を取り獲て、その御祖を得ざりき。故、その軍士等、還り來て奏言しけらく、「御髪自ら落ち、御衣易く破れ、また御手に纏かせる玉の緒すなはち絶えき。故、御祖を獲ずて、御子を取り得つ。」とまをしき。ここに天皇悔い恨みたまひて、玉作りし人等を惡まして、その地を皆奪ひたまひき。故、諺に『地得ぬ玉作』と曰ふなり。

また天皇、その後に命詔したまひしく、「凡そ子の名は必ず母の名づくるを、何とかこの子の御名をば稱さむ。」とのりたまひき。ここに答へて白ししく、「今、火の稻城を焼く時に當りて火中に生れましつ。故、その御名は本牟智和氣の御子と稱すべし。」と白しき。また命詔りしたまひしく、「何にして日足し奉らむ。」とのりたまへば、答へて白ししく、「御母を取り、大湯坐・若湯坐を定めて、日足し奉るべし。」とまをしき。故、その後の白せし隨に日足し奉りき。またその後に問ひて曰りたまひしく、「汝の堅めし瑞の小佩は誰れかも解かむ。」とのりたまへば、答へて白ししく、「且波の比古多須美智の宇斯の王の女、名は兄比賣、弟比賣、この二はしらの女王は淨き公民なり。故、使ひたまふべし。」とまをしき。然して遂にその沙本比古の王を殺したまひしかば、その同母妹もまた従ひき。」(古事記 垂仁天皇 岩波文庫)

二、雌鳥皇女と隼別皇子
めどりのひめみこ はやぶさわけのみこ

雌鳥皇女は、朝日日本歴史人物事典では、「五世紀前半、応神天皇と宮主宅媛(宮主矢河枝比売)との皇女。女鳥王ともいう。仁徳四十年、仁徳天皇は異母妹の雌鳥皇女を妃にしようとして、ふたりにとつて異母兄弟の關係にある隼総別皇子を仲人にたてた。しかし、皇后に気兼ねした皇女はひそかに皇子の妃となつてしまった。その後隼総別皇子が皇位への野心をあらわにするや、天皇は逃げたふたりを殺させた。夫妻共に廬杵河の辺(三重県一志郡家城町)に埋葬された。追討者は禁じられていたにもかかわらず、殺した皇女の体から玉の腕飾りを奪い取り、こつそり他の女性に与えていた。のちに皇后に見つかり、処罰されたという。」と記され、隼別皇子は、講談社日本人名大辞典には、「母は糸媛。『日本書紀』によれば、仁徳天皇が雌鳥皇女を妃にむかえようと隼別皇子をつかわしたが、皇子はひそかに皇女を妻とした。天皇の怒りにふれ、皇女とともに伊勢神宮にのがれたが、天皇の追手に殺されたという。『古事記』には速総別王と記され、女鳥王に謀反をそそのかされたところある。」と記されている。これだけだと、不倫と叛逆、その皇女から玉飾りを奪った追手が皇后に処罰された?なんだろう?



古事記では、配役は、雌鳥皇女は女鳥王、隼別皇子は速總別王。天皇は仁徳天皇、大雀命、皇后は石之日賣命。女鳥王の姉が八田若郎女となる。

古事記によれば、仁徳天皇は八田若郎女を妃にしようとされたが、皇后（正妻）の石之日賣命は非常に嫉妬深く、強硬に反対され、うまくゆかなかった。ところで、今度は、その妹を乞い、異母弟の速總別王に仲介を頼まれた。石之日賣命を説得できない以上、姉と同じ運命を辿るのは明白。それにもかかわらず話をすすめようとされる天皇に、女鳥王は拒否反応を示されたのであろう、ここは速總別王に頼るしかない、速總別王の妻になりたい、と婚を約し結ばれてしまわれた。速總別王にとっては予期せぬ展開であらうが、それをお受けになられ、天皇にはそのことを伏せられた。

速總別王が報告に來ないのにしびれをきらし、天皇が機織をしている女鳥王のところへ、自ら乗り込んでこられた。女鳥王と速總別王のやり方にも驚かされるが、速總別王に問いたださず、いきなり女鳥王のところへお見へになるというのも、どうしたことであらうか、仁徳のある人の行動とは思はれず、そういう展開とならざるをえない事情があったとでもしておくほかない。

さて、天皇が誰のために織っているかと歌を詠まれると、速總別王のためとの歌が返へされ、天皇はその情をさと引き下られた。しかし、間の悪いことに、速總別王が帰宅され、妻となっていた女鳥王は、姉のこともありついつい本音を歌にして揶揄された。仁徳天皇は大雀命、雲雀である。片や、速總別王は隼、雲雀は隼のように天高く飛び回ることはできない。そんな雲雀なんか隼が取ってしまったてくれればいいものを。

この歌を聞いた天皇は、叛逆の意図ありとして、先回りして兵を差し向け、二人は追はれる身となる。妹の運命まで翻弄することになろうとは、八田若郎女の嘆きはいかばかりであったろうか・・・仲介を頼まれたばかりに、叛逆者にされてしまった速總別王こそ気の毒の極み、うっかり仲介にたつたのが迂闊。これが事の起こりといふ。

展開は同じようだが、書紀では、様子ががらつと違ふ。背景と解釈が異なるのであるが、書紀には干支による年月日が示されるため（西暦は通年計算の便宜上挿入）、古事記にはない事態が見えてくる。

それは、仁徳天皇、四十年の春二月（AD352.02）のことであった。仁徳天皇は大鷦鷯天皇が本名で、仁徳は、後に与へられた漢風の諡である。皇后（正妻）は磐之媛命であるが、古事記とは違ひ、この時には既に、亡くなられておられ、天皇は八田皇女を妃として

おられた。これでは前提が違ってくる。

実のところ、大鷦鷯尊は父、譽田天皇(應神天皇)十三年の春三月 (AD282.03) に、父にと差し出された日向髪長媛を見初め、武内宿禰を通じて賜っておられる。しかし、三十二年後の即位の二年 (314) に皇后とされたのは、この妃でなく磐之媛命であった。それから三十八年、髪長媛と一緒にいられてからでも七十年を経ており、天皇は相当のご高齢であったことになる。

八田皇女は、太子菟道稚郎子の妹であり、菟道稚郎子は亡くなるに際して (AD313)、大鷦鷯尊に八田皇女を宮に入れるよう託しておられた。廿二年の春正月 (AD334.01) に天皇は、八田皇女を妃としようとしたことがある。皇女の了解 (磐之媛命が皇后、正妻であり、自らは妃であつてもよい) は得られたというものの、磐之媛命はそれを断固として拒否され、結局これが引き金となり、皇后 (磐之媛命) は難波宮に帰られぬまま亡くなられた。

即位四十年となれば、八田皇女は、最少でも五十歳は越へておられよう。妹の雌鳥皇女もそう若くはあるまい。八田皇女の性格から反対されることはなかるうと思ひ、天皇はその妹をも妃にしようとした。書紀の場合、干支があり、年齢計算をすると、よくもまあその御歳で・・・と興ざめがするが、文面のみ追つておれば、若々しく思はれるのが書紀の筆法である。

書紀では、古事記とは逆で、隼別皇子が、密に雌鳥皇女を娶つたとしている。隼別皇子が報告をしないので、天皇が雌鳥皇女のもとへお出かけになられた。隼別皇子はさくららのたへのむすじ櫻井田部連、をさひ男鉏の妹糸媛の子、櫻井の屯倉の田部の管掌者が母方であり、桜井あたりわにに居られたのであろう。皇女の里は、和珥氏の山背の筒城方面となろうか、天皇自らその殿 (寝室) に乗り込もうとされると、縑 (かとり絹…より合わせた糸で堅く織つた絹) を織る女達が歌を詠んでいた。

「ひさかたの あめかねばた 天金機 めどり 雌鳥が お 織る金機 はやぶさわけ 隼別の みおすひがね 御襲料」

ひさかたのは、天にかかる枕詞。金機とは当時では最新の金属が用いられた機はたとされる。和珥氏のご自慢の織機で神衣、皇族の絹織物用であらう。その糸で雌鳥皇女が織っているのは隼別皇子の襲 (衣裳)。襲は世襲の襲でもあり、夫への晴着であつたらう。

書紀だけを読めば隼別皇子が雌鳥皇女に天皇の意向を伝えておられたかどうかは定かではない。隼別皇子が一方的に事態を進行させていると読者は思ふ。天皇は、女達の歌で、隼別皇子が密かに雌鳥皇女を娶ったことをさとられた。古事記によれば、譽田天皇（應神天皇）に献上された髪長媛の一件は、賜ったものではなく、横取りしたとあり、身に覚へのあることでもあり、八田皇女の立場も慮られ、隼別皇子とのこれまでのよしみもあり、恨まれたとはいへ、自重された。天皇の意向が雌鳥皇女に伝えられていなければ、騒ぎ立てぬことで事態を収束させることは出来た。

隼別皇子はそのまま黙って雌鳥皇女を妻にしてあげばよかったものを、膝枕で臥せっていると、優越感が口をつき、「鷓鴣と隼と孰か捷き」と答を求めてしまった。捷は「すばやい」ことであるが、戦ひに勝つことでもある。鷓鴣と隼のどちらが捷きかと問はれれば、だれでも隼が捷と答へよう。それが舍人たちにも聞こへ、調子に乗った舍人達が、隼は天に上り、天を飛び駆ける、地上の祭殿を飛び交う鷓鴣なんぞ取っておくれ、と囃し立てたことが、難波の天皇の耳に入った。私の恨みと自重していたが、そういう噂が広まれば社稷の問題として罪を問はねばならぬ。天皇は隼別皇子を殺す決断をされた³、といふのが書紀の展開である。これならば、叛逆とこじつけることは出来ようが、戯れから詰め腹を切られるごときもので、叛逆とは言へまい。これをみていると、叛逆者とされたかの狭穂姫、狭穂彦王が思ひ起こされる。

古事記によれば⁴、二人は追ってきた山部大楯連により、菟田、素珥山（大和国宇陀郡室生村の曾爾谷「奈良県宇陀郡曾爾村」、曾爾高原（地図）を越へたあたりで殺されたとする。山背の筒城から速總別王の里、桜井を頼り、書紀にあるごとく、そこから伊勢に向かはれたのであろう。そのときの歌、二首が残されている。

梯立ての 倉橋山を 嶮しみと 岩かきかねて 我が手取らずも
 梯立ての 倉橋山は 嶮しけど 妹と登れば 嶮しくもあらず

梯立ての⁵は、梯子をたてたような岩壁の、で倉橋山にかかる枕詞。倉橋山は、奈良県桜井市倉橋の南方の山（地図）。女鳥王が岩に手をかけて登ることはできないほど険しいので、手を差し出してとらせた。しかし、妻と登るのであれば、どうして険しいものか。危険が差し迫っているにもかかわらず、この歌のみ聞かば、山行きを楽しんでおられるかのごと

き心で女鳥王をつつみ、運命を受け入れておられる。これは、およそ、叛逆者の心境とは言へまい。天皇がこの二人の愛に嫉妬されていたのではあるまいか?と思はせる情がある。

書紀は、隼別皇子が雌鳥皇女を伊勢神宮に納れ、天皇から離そうとされたといふ。雌鳥皇女は皇后の妹であり、隼別皇子のみが逃げて、皇女がとどまっておられれば、命まで奪はれることはあるまい。しかし、雌鳥皇女もそれを願はれたのであろう。姉である皇后も、妹と一緒に逃げてしまはれたことで、重き罪に当たり、死罪を免れぬと心を決められた。天皇は、吉備品遅部雄鯉・播磨佐伯直阿俄能胡に二人を殺すことを命じられた。皇后は、身に纏う装身具を付けたまま妹を埋葬し、くれぐれも、皇女として常世の国へ送るよう願はれ、天皇もそうするよう厳命された。書紀にあっても、二人で越へれば 安らかな蓆(草のしきもの)と、逃避行の辛さ、惨めさなどはどこへやら、ここでも、二人は、おほいなる愛を交はしておられる。

古事記は山部大楯連が追手とし、菟田の素珥山で二人を殺したとするが、書紀は吉備の品遅部の雄鯉と播磨の佐伯直、阿俄能胡の二人が追手、吉備と播磨の勢力を動員したとしている。品遅部は、活目入彦五十狹茅天皇(垂仁天皇)の廿三年鵠を飼う鳥取造の姓の鳥取部、鳥養部、譽津部の譽津部のこと、譽津別命は活目入彦五十狹茅天皇と先にふれた狹穗姫の間の子である。その子孫が雌鳥皇女を叛逆者として追う立場といふ、なんといふめぐり合せであろう。阿俄能胡は、播磨風土記においては、神前郡多駝里の阿我乃古、品太天皇(應神天皇)が巡行されたとき、直にこの地を欲しいと申し出た剛の者。

二人が殺されたのは、蔣代野とされ、廬杵河の邊に埋められたといふ。三重県一志郡の雲出川の岸にある家城町(三重県津市白山町北家城)あたり、地元で、夫婦塚という遺跡があり、二人の墓とされる(白山町の伝説)。この時、雄鯉は、先祖の狹穗姫を想へば、二人を見逃すべきであり、殺さざるえないとしても、少なくとも手厚く二人を葬るべきものであるに、雌鳥皇女の玉を奪っていた。宮中の女性がファッション、ここでは装飾品、玉を競っていたのであろう、夫もそれがあってこの所業に及んだ。

古事記は、山部大楯連が女鳥王の玉を奪い、その妻に与へ、豊樂のとき、妻はその玉を手纏いて参列したといふ。これを、自ら酒を諸氏の妻にふるまはれていた大后、石之日賣の命がその玉に気付かれ、夫を召しだし、女鳥王の温かい肌から剥ぎ取った玉を己が妻に与へるとは死に値すると、処刑されたと伝へる。豊樂とは、新嘗祭の翌日の辰の日に行はれる豊明節会、書紀は、近江山君稚守山の妻と采女磐坂媛とがこの玉を纏けて

いたとする。皇后（八田皇女）がそれを疑ひ、役人に問はずと、佐伯直阿俄能胡の妻の玉とのことで、皇后が阿俄能胡に死罪を求められたが、阿俄能胡はその地を獻り、死罪を免れたと伝へる⁹。

不倫と叛逆、その皇女から玉飾りを奪った追手が皇后に処罰されたといふ話の内幕である。この当時の為政者の婚姻は、氏族間の結びつきであり、重要な政治行動であった。しかし、そこには男女間の愛がからみ、思はぬ展開をみせることになる。大鷦鷯天皇（仁徳天皇）は若いころに、日向髪長媛をみそめたものの、皇后には磐之媛命を迎へられた。たけしうちのすくね武内宿禰の子、かつらぎのそつびこ葛城襲津彦の女であり、朝鮮半島において將軍として重きをなした葛城の豪族との婚姻を最優先された。八田皇女、雌鳥皇女は太子菟道稚郎子の妹、豪族、和珥氏の出身であり、仁徳政権の中樞をなす氏族であった。襲津彦は半島で芳しくない行動を起こし、それが磐之媛命の立場を揺るがせた。仁徳天皇が磐之媛命、八田皇女と雌鳥皇女に執心されたのは、半島遠征の二大勢力、武内宿禰の一族（軍事部門）と和珥氏（通商部門）、の両豪族とのバランスを保つことにあった。

書紀や古事記はこの当時の半島情勢をおきながたらしひめのみこと氣長足姫尊（神功皇后）、譽田天皇（應神天皇）の時代のこととして記述しているが、歴史的には高句麗と百済が壮絶な戦いを繰り広げ、やまと日本がこれにのめりこんでゆく時代であった。両豪族の姫の心をなんとかしておきたい天皇の気持ちとは裏腹に、磐之媛命と八田皇女とは折り合いがつかず、雌鳥皇女に至っては不倫、叛逆とまで事がこじれてしまった。隼別皇子は、櫻井の屯倉の田部が母方であり、財政的にも安定した名門旧家の御曹司と思はれ、仲介を頼まれたことで事件に巻き込まれたとする古事記の伝承が理解し易い。古事記は山部大楯連の族を使って二人を殺させたとする。山部は山川を管理する職であり、山守部を任された仁徳天皇の兄、大山守皇子の系統になる。ところで、大山守皇子は、菟道稚郎子が太子となられ、自分が山守部となったことに不満があり、おそらく、その族に連なる山部大楯連は、その妹の雌鳥皇女にはよい感情を抱いていなかったと推測される。それが玉を奪うといふ行動に連なると古事記はみているのかもしれない。

一方書紀は、雌鳥皇女との仲介を頼んだ隼別皇子の引き起こした事件としている。激動する半島情勢（書紀は言及していないが）で襲津彦がおそらくは新羅にとりこまれたのであろう、百済が高句麗に大敗するなど、歴史的にみれば、国内的にも不穏な空気があり、半

島政策で揺れていたと考へられる。天皇が半島政策の要となる和珥氏との関係を更に深めようと考えたことを隼別皇子が意図的に妨げるとなれば、襲津彦が失脚し、和珥氏に一方的に傾斜してゆくことに歯止めをかけると映る。二人を追わせたのが吉備と播磨の勢力、半島政策を支へる豪族であることも符合する。近江山君稚守山は守山であり、近江の山部となろう。佐伯直阿俄能胡と通じていることになる。近江と播磨の間に交流があった。天皇としては、このことで、播磨の勢力を滅ぼすことは本意ではない、土地を差し出して死罪を免れたとするのは情勢を考へれば当然とも思へる。その地を玉代たまてと言ふ。

ならば、播磨佐伯直阿俄能胡が玉代に地を有していたことになる。玉代は大和国葛上郡玉手丘、河内国安宿郡、玉手山、玉手村と候補があるが、それでは、播磨佐伯直が大和国あるいは河内国に土地を持っていたことになる。これは妙なことになる。仁徳天皇が鹿を殺した佐伯部を安藝の淳田に移配されたといふ話があったごとく、阿俄能胡が大和国葛上郡玉手丘、あるいは河内国安宿郡玉手から、播磨に移されたと見るほうがつつまが合う。

さて、いろいろ見てきたが、本当のところは分からない。分からないが何故この話が残されているかとなれば、古事記や書紀に残された歌、そのところが人のところをうつつからであるう。

梯立はしたての 嶮さかしき山やまも 我わが妹子もこと 二人ふたり越こえれば 安やす薙むしろかも

この二人の恋は、兄弟姉妹関係ではなく男と女の間のもので、天皇のむたいな要求から逃れることに端を発したものであった。この隼別皇子の歌は、不倫、叛逆などという噂話をものともしない情こころから発している。運命を受け入れ、逍遙せうぎょうとして女と果てることをいとはない、まねのできることではない。

1. 天皇、その弟速總別の王を媒として、庶妹女鳥王を乞ひたまひき。ここに女鳥王、速總別の王に語りて曰ひけらく、『大后の強きによりて、八田の若郎女を治めたまはず。故、仕へ奉らじと思ふ。吾は汝命の妻にならむ。』といひて、すなはち相婚ひき。ここをもちて速總別の王、復奏さざりき。ここに、天皇、女鳥の王の坐す所に直に幸てまして、その殿戸の闕の上に坐しき。ここに、女鳥の王、機に坐して服織りたまへり。ここに、天皇歌ひたまひしく、

女鳥の我が王の織ろす機 誰が料るかも

とうたひたまひき。女鳥の王、答へて歌ひたまひしく、

高行くや 速總別の 御襲衣料

とうたひたまひき。故、天皇、その情を知りたまひて宮に還り入りましき。この時、その夫

速總別の王到來ましし時、その妻女鳥王、歌ひたまひしく、

雲雀は 天に翔る 高行くや 速總別 鶴鶴取らさね

とうたひたまひき。天皇、この歌を聞きたまひて、すなはち軍を興して殺さむとしたまひき。

(古事記 仁徳天皇 岩波文庫)

2. 天皇は、「貴人の立つる言立 儲弦 絶え間継がむに 並べてもかも」、「誓つて言うことだが、替への弦、切れたときに使う予備に並べるだけのこと、当時の常套句といふ説もあるが、予備の弦の妃であり、皇后は誓之媛命、あなたであるというものであるが、皇后は、「衣こそ二重も良き 夜床を 並べむ君は 畏きろかも」、皇后は、衣と寝所を同じにするなど、何と恐ろしい神経の持ち主かと、お断りになられた。(書紀卷十一、仁徳天皇、廿二年春正月)

3. 「雌鳥皇女を納れて妃とせむと欲して、隼別皇子を以て 媒 としたまふ。時に隼別皇子、密に親ら娶りて、久に復命さず。是に、天皇、夫有ることを知りたまはずして、親ら雌鳥皇女の殿に臨す。時に皇女の爲に織繰る女人等、歌して曰はく、

比佐箇多能 阿梅箇儼麼多 謎迺利餓 於瑠箇儼麼多 波押歩佐和氣能 彌於須臂鵝泥

ひさかたの 天金機 雌鳥が 織る金機 隼別の 御襲料

爰に天皇、隼別皇子、密に婚けたることを知りたまひて、恨みたまふ。然るに皇后の言に重り、亦友 于の義に敦くまして、忍びて罪せず。俄ありて隼別皇子、皇女の膝に枕して臥り、乃ち語りて曰く、「鶴鶴と隼と孰か捷き。」曰く、「隼は捷し。」乃ち皇子の曰く、「是、我が先てる所なり。」天皇、是の言を聞きしめして、更に亦恨を起したまふ。時に隼別皇子の舍人等、歌して曰く、

破夜歩佐波 阿梅珥能朋利 等弭箇慨梨 伊菟岐餓宇倍能 娑契岐等羅佐泥
 隼は 天に上り 飛び翔り 齋が上の 鷓鴣取らさね

天皇、是の歌を聞こしめして、勃然大きに怒りて曰はく、「朕、私の恨を以て、親を失はまほしみせず、忍びてなり。何ぞ齎ますとして私の事をもて社稷に及さむ。」則ち隼別皇子を殺さむと欲す。」(書紀卷十一、仁徳天皇、四十年春二月 岩波文庫)

4. 「ここに、速總別の王、女鳥の王、共に逃げ退きて倉椅山に騰りき。ここに速總別の王、歌ひたまひしく、

梯立ての 倉椅山を 嶮しみと 岩かきかねて 我が手取らすも

とうたひたまひき。また歌ひたまひしく

梯立ての 倉椅山は 嶮しけど 妹と登れば 嶮しくもあらず

とうたひたまひき。故、其地より逃げ亡せて、宇陀の蘇邇に到りし時、御軍追ひ到りて殺しき。」(古事記 仁徳天皇 岩波文庫)

5. 「時に皇子、雌鳥皇女を率て、伊勢神宮に納らむと欲ひて馳す。是に、天皇、隼別皇子逃走たりと聞しめして、即ち吉備品遅部雄鯉・播磨佐伯直阿俄能胡を遣して曰はく、「追ひて速かむ所に即ち殺せ。」爰に皇后、奏して言したまふ、「雌鳥皇女、寔に重き罪に當れり。然れども其の殺さむ日に、皇女の身を露にせまほしみせず。」乃ち因りて雄鯉等に勅したまふ、「皇女の齎たる足玉手玉をな取りそ。」雄鯉等、追ひて菟田に至りて、素珥山に迫む。時に草の中に隠れて、僅に免るることを得。急に走りて山を越ゆ。(書紀卷十一、仁徳天皇、四十年春二月 岩波文庫)。

6. 是に、皇子、歌して曰く、

破始多氏能 佐餓始枳椰摩茂 和藝毛古等 赴駄利古喻例麼 椰須武志呂箇茂

梯立ての 嶮しき山も 我妹子と 二人越ゆれば 安蓆かも

(前掲書)

7. 爰に雄鯉等、免れぬることを知りて、急に伊勢の蔣代野に追ひ及きて殺しつ。時に雄鯉等、皇女の玉を探りて、裳の中より得つ。乃ち二の玉の屍を以て、廬杵河の邊に埋みて、復命す。皇后、雄鯉等にはしめて曰はく、「若し皇女の玉を見きや。」對へて言す、「見ず。」

(前掲書)

8. 「その將軍山部大楯連、その女鳥王の御手に纏かせる玉釧を取りて、己が妻に與へき。この後、豊樂したまはむとする時、氏氏の女等、皆朝参りしき。ここに、大楯連

の妻、その王の玉釧を、己が手に纏きて参り赴きき。ここに太后、石之日賣命、自ら大御酒の柏を取りて、諸の氏氏の女等に賜いき。ここに太后、その玉釧を見知りたまひて、御酒の柏を賜はずして、すなはち引き退けき。その夫、大楯連を召し出して詔りたまひしく、「その王等、禮無きによりて退けたまひき。こは異しき事無くこそ。それ奴や、己が君の御手に纏かせる玉釧を、膚も慍けきに剥ぎ持ち來て、すなはち己が妻に與へつる。」とのりたまひて、すなはち死刑を給ひき。(古事記 仁德天皇 岩波文庫)

9. 是歳、新嘗の月に當りて、宴會の日を以て、酒を内外命婦等に賜ふ。是に、近江山君稚守山が妻と采女磐坂媛と、二の女の手に、良き珠纏けること有り。皇后、其の珠を見すに、既に雌鳥皇女の珠に似たり。則ち疑ひて、有司に命して、其の玉を得し由を推へ問はしめたまふ。對へて言す、「佐伯直阿俄能胡が妻の玉なり。」仍りて阿俄能胡を推へ鞠ふ。對へて曰す、「皇女を誅しし日に、探りて取りき。」即ち將に阿俄能胡を殺さむとす。是に、阿俄能胡、乃ち己が私の地を獻(たてまつる)りて、死贖(しぬる)つみあがな(はむと)請(まう)す。故、其の地を納めて死罪を赦す。是を以て、其の地を號けて玉代と曰ふ。

(書紀卷十一、仁德天皇、四十年の春二月 岩波文庫)

三、磐之媛命（石之日賣命）

大鷦鷯天皇（仁徳天皇）の皇后、葛城襲津彦の女、磐之媛命は、非常に嫉妬深い女性とされている。古事記によれば、^{みめ}宮中の妾が天皇に自分と違う目立つようなことを言ふと、足を踏み鳴らして黙らせたようである。皇后に聖人君子のような道を説き、耐乏生活を強いた大鷦鷯天皇が好まれたものは、徳ばかりではなかった。容姿端麗な黒日賣を吉備より召し上げられたことがある。ところが、皇后の嫉妬を畏れてお帰りになったといふ。天皇がその船出を惜しんで詠まれた歌を聞くやいなや、皇后は墨江の津のある大浦に人を遣はし、一行を下船させ、徒歩で去らせたといふから、すざまじい。

天皇は淡路島を国見に出ると偽って黒日賣を追はれ、皇后には難波の岬を出ると、淡路島、淤能碁呂嶋、檳榔（びんろう、ヤシ科）の木のある島や離れ島がみえる、などと如何にも国見を行っているかのごとく歌を残されて、ひそかに吉備に上陸された。吉備の山では黒日賣が食事を用意しようとして、嬢子に菘菜を採ませていた。天皇は嬢子と一緒に楽しく菘を摘まれた。天皇が黒日賣のもとに登り来られると、黒日賣は歌を二首詠まれた。やまとの方に西風が吹いて、雲が離れ離れになるように、分かたれてここに居るとしても、私は忘れない。やまとの方にゆくのはどなたの夫、隠水の下（隠し妻のところ）に、よ延へつつ（ひそかに通つて）、帰つてゆくのはどなたの夫かしら。

吉備の女とのロマンスはロマンスにとどまらぬ、どの豪族とよしみを結ぶかは重大な政治案件である時代、単なる浮気と片付けることは出来ない。高句麗の侵攻で緊張する半島に百済と手を結ぶ日本の政権の長として、吉備、瀬戸内海航路の要所をがっちり押さえることは父の時代からの申し送り事項であった。

書紀は、つづいて、宮人、桑田の玖賀媛との事をいふ。桑田は和名抄の丹波国桑田郡（京都府亀岡市・旧桑田郡）。豪族が宮に女を入れたのであろう。男の場合は、舎人、「とね」が近習をあらはす。大鷦鷯天皇が舎人等に、玖賀媛を愛まんと意向を伝えられたものの、皇后が妬み、床を共にすることが出来ず、そのまま長年が過ぎ去り、その盛りを妨げてしまった、と嘆き歌を詠まれたといふ。

水底ふ 臣の少女を 誰養はむ

（「みなそこふ…水底経」であれば、表に出ずずっと日陰にいた、「みなそそく…水注ぐ」

が訛なまったとするなら、まだ瑞々しい。臣おみの姓むすめの豪族むすめの女である。誰か妻むすめにしてくれる者は居いないか？)

これは難題であった。しかし、一人、名乗り出た者がいた。

みかしほ 播磨速待 岩壊す 畏くとも 吾養はむ

速待はやまち、その子孫が播磨國くノみやつこ造つくりとなるのであるが、その決断でこの名がついたのであろうか。「みかしほ」は「みいかしほ」の約、「み」が尊称、厳潮、大潮で、播磨にかかる。大潮の播磨でも速待と言はれた私が、岩をも砕くほどに恐れ多きことながら、面倒をみましよう、と申し出た。

天皇は即刻、速待に玖賀媛を賜はった。翌夕に速待は玖賀媛の処へ夜這ひを決行する。

和あまなみは互いに好意を持つことである、結果は不和あまなはず。強引に帷内ねじろに近づいたが、見知らぬ若者に媛は訳を問ふも、心はゆるされなかった。玖賀媛が天皇を想はれる気持ちは、天皇の想像とは違っていた。天皇がそうおほせになるなら、私は夫つまをなくした寡婦やもめと心に言い聞かせ、もう一人のまままで一生を終へたい、どうして、いまさら人妻ひとめかけになれましよう、とこばまれた。ところが、天皇は無理な願ひを受け容れた速待の心意気に引くもならず、速待に玖賀媛を桑田へ送らせ、道中に二人が和あまなふことを期待された。しかし、結果は最悪となった、媛は京を離るれば離るるほど心萎なへ患わづらひ、そのまま道中でみまかられた。古事記のごとく、あつけらかんとした展開ではない。二人の男女を深く傷つけておられた。

磐之媛命が皇后となられたのは、天皇即位の二年(AD314)のこと、この一件は十六年秋七月の条にあり、結婚されて十四年目の出来事となる。それから六年後の二十二年に今度は八田皇女やたのひめみこを納めしいれたいとされた。

まず、古事記のいふ所を聞いてみよう。古事記では、八田皇女は八田若郎女やたのわかいらつめである。皇后が宴会で酒を盛る柏の葉みつながしは(御綱柏)を採るために紀の国にお出かけになると、これ幸ひと、天皇は八田の若郎女と婚まけはひされた。皇后が御綱柏を満載して難波おほわたりの大渡に帰ってこられると、宮中で水を扱う官吏として出仕している吉備の兒島の仕丁よぼろ(人夫)から噂を聞いた倉人女くらひとめ(蔵司に仕える女)が、皇后の船を追ひ、このことを告げた。皇后は激怒、満載していた御綱柏を海に投げ捨て、港に入らず、堀江から山代に向かはれた。山代河は木津川のこと、淀川を上り、木津川あたりまでこられ、歌を詠まれた。

つぎねふや 山代河を 河上り 我が上れば 河の邊に 生ひ立てる 鳥草樹を
 鳥草樹の木 其が下に 生ひ立てる 葉廣 五百箇眞椿 其が花の 照り坐し 其が葉
 の 廣り坐すは 大君ろかも

(岸辺に鳥草樹へシヤクヤク科の常緑灌木が生い茂り、その下に五百箇眞椿が咲いている。五百箇は齋津、神聖なこと。眞椿でもあり天皇のこと。この椿のように、私に隠れたところ、照りはえ、広葉を広げる大君とは。)

八田の若郎女と日夜戯れておられる、こんどというこんどは、どうしてくれよう、と恨み心乱れ、山代から那良の山の口に来て、また、歌を詠まれた。山代を上がると、(心に想うのは) 那良を越へ、倭を越へ、葛城高宮 故郷の吾家のあたり(もう故郷にかえりたい)。山麓には、筒木の韓人、奴理能美の家があり、そこに身を寄せられた。

これを聴かれた天皇は、舍人の鳥山を遣はし、歌を託された。山代に急げ鳥山、急げ急げ、吾愛妻に急いで遭っておくれ。続いて、天皇は、丸邇の臣口子を筒木に遣はし、歌を託された。御諸の高城の大猪子が原(神靈宿る皇后の故郷の原)の大猪子(皇后)の肝向ふ心(肝臓に向かい合っている心…肝と心)に もうお互いを想ふ気持ちはないとでもいふか。更に、山代女が木鋏を持ち、打ちし大根の根白のごとき 腕を枕かなかったといふなら、知らないとも言へようものを、と続けられた。

口子はその歌を伝へようと戸口に来ると、大雨が降ってきた。その雨の中、表の殿戸に伏せると、皇后は裏の戸から出られ、裏戸に伏せると表戸から出られた。這って庭に回り、ひざまづくくと水が腰まで浸した。口子は青い衣服に紅の紐を着けていたが、その色が落ちて衣服は紅色に染まってしまった。実はそこには、皇后に仕える口子の妹の口日賣がおり、みかねて、歌詠みした。「山代の筒木の宮に物申す吾兄の君は 涙ぐましも」。口日賣が妹とわかり、皇后は口子から天皇の伝言を聞かれたことであろう。

口子、口日賣、奴理能美の三人は、相談をして、皇后が筒木の奴理能美を訪ねたのは、奴理能美の養う虫、一度は這い、一度は鼓(繭…まゆ)になり、一度は飛ぶ鳥(蛾)に変わる奇しき虫(蚕)を見たくて来られたもので、異心はないと天皇に報告することにした。報告を受けた天皇は、それは不思議なもの、見てみたいと、すぐさま難波をたち、奴理能美の家に幸された。そのとき、奴理能美が蚕を皇后に献ると、天皇が歌を詠まれた。「山代女が木鋏を持ち、打ちし大根」までは一緒だが、ここでは天皇が自らを打たれた大根と

いふ。さわさわに（騒々しくも） 汝がいへせこそ（あなたが言うものだから） 打ち渡す（見渡す） やがはえ（弥木栄あるいは八桑枝の転訛とされる） なす 来入り参来れ。家の周りに繁る桑の葉のごとく、行幸の形で大勢の者を伴ったが、あなたを迎へるために私も、伴の者達もやってきたのです、とまるく収めてしまった。

一方、何の説明もなく、八田の若郎女に詠まれた歌が記される。八田の一本菅は、とはじまる。菅でも、一人静というは吉野御前とか眉掃草などと命名され、美女が連想されるようである。一本が冠されており、「子持たず」に通じる。夫も子もなくなれば、立ちか荒れなむ（立ったままで朽ち果てる） あたら菅原（惜しい菅、原は軽く添えた語） 言をこそ（言葉の上では） 菅原と言はめ あたら（惜しいほどに） 清し女 どうやら八田に追われ一人で暮らすことになったとみえる。八田の一本菅は、「獨居りとも 大君し よしと聞こさば 獨居りとも」と現状を受け容れて、歌を返しておられ、天皇にできることは、八田の若郎女の御名代として、八田部を定めることくらいしかなかった。片や権勢ある一族を父に持つ「さわさわ女」、片や太子でありながら禪譲をした聡明な兄を持つ「すがし女」、いつの世にもある取り合せである。古事記はこう伝えるが書紀では様相がひどく異なる。

天皇は、皇后に八田皇女を妃にしようと欲ふと切り出された。二十年ほど前、太子、菟道稚郎子の臨終に際して、「納采（妻を迎える）にはまいらぬだろうが掖庭（後宮）にでも加えてください。」と八田皇女のことを託されておられた。その時にそうせずに、何故このときに改めて妃にしようとしたのか、動機は記されていない。皇后は聴さず、天皇は歌して、皇后に乞はれた⁴。

「貴人の 立つる言立（誓いを立てること） 儲弦（替えの弦） 絶え間継がむに（切れたときに使う予備） 並べてもかも」当時の常套句といふ説もあるが、予備の弦の妃、だから皇后と皇女を並べておいてもいいでしょう、とはいかがなものか。皇后は、「衣こそ 二重も良き さ夜床を 並べむ君は 畏きろかも」畏は畏れること。衣と寝所を同じにするなぞ、何と恐ろしい神経の持ち主かと、お断りになられた。更に、天皇は、「押照る（難波の枕詞） 難波の埼の 並び浜 並べむとこそ その子（八田皇女）は有りけめ」難波の岬の向こうにある並び浜のように、（二人を）並べることを その子は納得している、天皇はもう話が出来ていると、譲歩を求められるも、皇后は、「夏蚕の 蚕の衣 二重著て（夏に蚕は繭を二重に囲むけれど） （人の寝所の） 囲み宿りは 豈良くもあらず」と同意されなかった。天皇が更に、「朝孀（葛城の朝孀、皇后の故郷）の 避介（場所不明）の小坂を

片泣き（一人で泣く）に 道行く者も 偶ひて（対になって）ぞ良き」もし、貴方が故郷に泣き帰るようなことがあるとすれば、一人よりは二人の方がいいでしょう、とたたみかけられると、皇后はゆるしがたく、黙して、歌を返されることすらなかった。古事記とは異なり、陰鬱な展開となっている。書紀の場合には干支が記されており、その後、八年の歳月が流れた。

三十年秋九月（AD342）⁵、皇后が紀國の熊野岬に御綱葉を取りにゆかれた。神事の酒器に用ゐるものといふ。御綱柏はウコギ科オオタニワタリあるいはカクレミノ、串本の潮御崎神社の辺りに群生するマルバチシヤノキともある。書紀が熊野岬としたことは、どういふ意味を持つのであろう。御綱柏が必要ならば、貢納させる、誰かを派遣することで事足りる。しかし、皇后にとっては、その神事を行ふに、自らの手で採取した御綱葉を必要とし、それも熊野のものでなければならぬといふ思ひがあり、そこまでなさることはない、と反対する声押し切りなされたことかもしれない。

難波から船で熊野へ行くことは、磐余彦尊（神武天皇）が辿られた歴史を心に呼び起こすことになる。熊野の神邑では暴風に遇はれ、それをおさめるために、稲飯命は劔を抜きて海に入り、鋤持神さきもちのかみとなられ、三毛入野命は浪をけつて常世郷とこよのくににゆかれた。また、熊野には伊弉冉尊が葬られたとされる紀伊國熊野之有馬村がある。根の国への入口とも考へられ、頭界と幽界の境界でもあった。磐之媛命は、その熊野の靈験ある御綱柏を積んで難波に戻つてこられた。ところが、八年前に終わつたはずであつたといふに、その間に天皇は「八田皇女を娶して、宮の中に納れ」て、「合八田皇女」睦み合つておられた。それを聞かれた磐之媛命は、恨まれ、御綱葉を海に投なげられてしまはれた。謹みて採取されたものは、謹みて使はれるべきもの、その意味が失せてしまった。

大鷦鷯天皇（仁徳天皇）が半島を経由する漢文化に傾斜してゆかれること自体は悪くはない。自らの原点、先人の築かれた恩恵をないがしろにする人でもなかったはず。ところが桑田玖賀媛の一件以来、妃のことからどうも見境ひが失はれ、大事な神事の器をなんともし召されておられようか。さようなことで大切なことが失はれてゆく。磐之媛命は難波の津に上陸する気は失せ、難波の宮から新たにできた倭やまと（奈良）への大道もうとましく、そのまま船で淀川へと向はれた。

一方天皇はそんなこととはつゆ知らず、港に迎へに出て歌を詠まれた。鈴の音は元来、神を呼ぶ音、邪霊を祓ふ音。皇后は鈴を吊るした船に乗つておられた。「難波人よ鈴船を

ひけ。腰まで水につかってその船をひけ。大御船をひけ」、おそらくは、鈴船が見つからないので、早くみつめて曳いてこい、一番大きな船だ、といふことであろう。磐之媛命は、すでに山背から倭に向っておられた。翌日、天皇は、舍人鳥山にあとを追はせて、歌を託された。山背に 急げ鳥山 急げ急げ 吾が思ふ妻に 急ぎ会っておくれ。一刻も早く会ひたいので帰へられよ、とばかりに。

磐之媛命は帰へろうとはされなかった。山背河、淀川を遡り、木津川についておられた。愕然とした心のなかに、八田皇女の兄、皇位を禪譲しつづけて自ら命を絶たれた菟道稚郎子の姿がよぎりはじめた。中国の文化にも通じておられたが、ご先祖のこと、今の世の移り変はりをどう考えておられたのであろうか？太子なら今の私の心が通じたのではないかと菟道（宇治）に足が向いたのかもしれない。

木は 大君ろかも
 つぎねふ 山背河を 河浜り 我が浜れば 河隈に 立ち栄ゆる 百足らず 八十葉の

つぎねふや 山背河を 宮浜り 我が浜れば 青丹よし 那羅を過ぎ 小楯 倭を
 過ぎ 我が見が欲し国は 葛城高宮 我家のあたり

（「つぎねふ」は次から次と嶺が経へつづくで、山背にかかる詞。百足らずは、百に満たない、で八十にかかる詞。「山背河を遡ってくる」と、河の曲がり角に立って栄えている、葉の繁った樹は、立派で我が大君にそっくりであるな」とある。「百には足りないが多く、の女を娶る天皇」とみるむきもある。河を遡ると、河が曲がるたびに 大君のことで心が揺れる。このままでいいのだろうか。確かにあちらもこちらも栄へている。しかし、百には足りない八十葉の木、それが大君なのかもしれない。そのことを申し上げて通じるかしら？次から次とあらはれる嶺を見上げて物を想ふに、突如として、故郷の嶺が思ひ起こされた。那羅山を越えて、葛城を望むと、神靈宿る葛城の高宮が見えた。故郷の神々と先祖の加護を願はずにはおれなかった。つぎねふへ枕詞へ山背河を 難波の宮を遡り 心のままに遡ると へ心は青丹よしへ枕詞へ奈良を過ぎ 小楯へ枕詞へ楯を伏したような山に囲まれた倭を過ぎ 我が見が欲し国は 葛城高宮 我家のあたり。）

ところが、葛城にお帰りになられたかといへば、そうでなく、山背に戻り、宮室を筒城岡の南に建てて住まれたといふ。和名抄の山城国綴喜郡綴喜郷（京都府京田辺市普賢寺付近…

地図)とされ、同志社大学の校内敷地に筒城宮跡石碑があるが、場所は特定されていない。古事記は、筒木の韓人、奴理能美の家としていた。近江から難波といふ淀川水系の物流が盛んになり、奈良と通じるこの一帯は土木技術を持つ渡来人により開発が進んだのである。しかし、磐之媛命が、何故、葛城でもなく、難波でもなく、筒城に住み着かれることになったのであろうか？

十月になり、天皇は^{いくはのおみ}的臣^{おや}が祖^{くちもろのおみ}、口持臣^{つかは}を遣^{つかは}して皇后を迎へようとされた。冬十月の雪まじりの冷たい雨の中、天皇の命を受けた皇后と同族の使者を、皇后が黙して放置されたといふは、その拒否のすざまじさを表す。衣服がへばりつき、濡れ鼠であり、雪まじりであれば、凍える寒さであつたらう。國依媛^{くによりひめ}といふ的臣の祖の妹にあたる媛が、兄のその姿を目の前にして、涙まじりに、「・・・兄を見れば、涙ぐましくもある」と歌を詠み、事情を聴いた皇后は、「私は決して返らない」、「兄を即刻還^{かへ}らしてあげなさい」と國依媛に告げ、口持は天皇にその旨を報告することができた。

口持臣、古事記の口子臣は、使^{つかひ}として口上を伝えることから付けられた名前とされる。口子臣は丸邇^{わに}の臣の祖と古事記は伝へている。和珥^{わに}臣の遠祖^{とほつおや}、彦國葺^{ひこくにぎ}が武埴安彦^{たけはにやすび}を山背で討つて以来、和珥氏は山背から近江へ進出するようになり、菟道^{うぢ}(宇治)の近くの木幡^{こはた}で、譽田天皇(應神天皇)が六年(AD275)に、和珥臣の祖、日觸^{ひふれのおみ}使主^{むすめ}の女、宮主宅媛^{みやぬしやかひめ}と出会ひ、菟道稚郎子^{うぢのわかいらつこ}、八田皇女を生んでおられ、八田の若郎女と同系の口子が使者となれば、皇后が冷たい対応をなされるもうなづけよう。姓氏類別大観においても、口子、國依媛を宮主宅媛(宮道宅媛)の弟、妹としている。八田皇女の叔父、叔母となり、叔父が使者、叔母が磐之媛命に仕へているといふことになる。書紀には干支があり、これでは、七十年弱の年月を経ており、大変な老爺の叔父が雪雨の中を地に伏せ寒さに震え、老婆の叔母が悲しみにむせぶとなり、奇怪な様相となる。書紀では超絶老人でありながら、若者のごとく登場してることがよくある。

しかし、書紀は、そうでなくて、^{いくはのとだのすくね}的臣の祖とする。そうであれば、^{とだのすくね}砥田宿禰つまり^{とだのすくね}的戸田宿禰と同じ系統であり、葛城襲津彦の子孫、磐之媛命と同系となる。妹の國依媛も同じとなる。和珥氏の地である筒城に身を寄せておられるところからすれば、葛城との縁を切ろうとされているようであり、同族であるが故に一層拒否反応がでたことにならうか。非常に困ったなりゆきであるが、そのわけは明かされていない。

十一月になり、天皇は浮江うきはねより山背に向かはれた。難波から船で淀川を遡られた。

つのはさはふ 磐之媛いはのひめが おほろかに 聞さぬ 末桑うらぐはの木 寄るましじき 河の隈かはくまくま
 寄ろほひ行くかも 末桑うらぐはの木

「つのはさはふ」は蔓沢山つのはさはふ這の約、磐にかかる枕詞。「おほろかに」は「おぼろかに」に同じ、下に打ち消しの語を伴い、おろそか、なおざりなこと。「うらぐは」は「うらぐひへ心恋」をかけるもの、「末桑の木があちこちの岸にぶつかりながら流れるのを見て、磐之媛と八田皇女との間に動揺する自分の気持ちと通うもののあるのを感じての歌であろう」とされる。）

さて、桑の木が流れてきた。蚕を飼っている。この地は、綺戸邊かにはたてへ、綺は蟹機かにはたとあり、機織の技術をもつ渡来人の地でもあり、和珥氏を豊かにするものであったろう。磐之媛は（私、仁徳天皇）をおろそかにして（私の言ふことを）聞こうともしない。末桑の木とは、ここでは、天皇のこと。流れるだけで（磐之媛）に寄り付くことができない。河の曲がり角で寄りつくかと思へど、寄りつかない。私はそんな末桑の木。一向にらちはあかない、天皇は意を決して、筒城宮に自ら乗り込んで皇后を喚めされた。

ところが、皇后は出てこようとされなかった。天皇は媛に聞こへよと歌を詠まれた。「山背女が木の鋏で掘り起こした大根、その大根の葉のざわつくように、ざわざわと。あれこれあなたが言われるからこそ。見渡す向こうにある木の枝の茂るように、大勢人を引きつけて、あなたに逢いに来たものを」と。山背女が木の鋏をかかえて打ちし大根のごとく、あなたもさわさわ言ふからこそ、見渡すばかりの桑畑に茂る木々のごとく、私もまいり、多くの供の者も従がへてきた。この地の大根がよほど立派であったとみへる。打たれた大根とは天皇、随分とあなたには打ち据へられたけれど、大勢を率ゐて迎へにきたのだから。更に、歌を詠まれた。山背女が木の鋏をかかえて耕した大根のごとく、みずみずしいばかりの根白の あなたの白い腕が 私の首を巻かなかったといふなら 知らないと言へようけれど。磐之媛を堅い磐じゃなく、みずみずしい大根にみたてて、あなたを筒城からひきぬき、難波でその白い腕に巻かれない、と想ひを打うた（ぶつけら）れた。

しかし、皇后は人を介して伝言をされるのみで、姿をお見せにならなかつた。陛下を「きみ」と訓じ、夫としての大君でなく、一段身を低くして 謙へりくだり伝言された。「陛下は、八田皇女を妃としてお召しになり、私を皇女ひめみこの副そへの后きさきになされようとのことでしょう。」

並べられ、添そへられることにはあくまでも背をむけられた。天皇は、磐之媛の磐のごとく堅い心を恨みつつ、難波に長い行列を率ゐてお還りになられた。天皇の心はそれでも磐之媛から離れることはなかったといふ。何故磐之媛は天皇に心を閉ざして、和珥氏の地に留まられたのか？古事記とは百八十度異なる顛末を書紀は伝へる。

大鷦鷯天皇（仁徳天皇）と菟道稚郎子の関係を対立する権力闘争であったとする説がある。むしろ。この論調の方が支配的ですからある。大鷦鷯尊が実は菟道稚郎子を殺し、以降、和珥氏と敵対関係になったとする。これを融和するために、八田皇女を妃とする政略結婚が図られたが、磐之媛は反対であった。しかし、後には自ら敵地に乗り込んで、収拾をはかろうとされたとする。

菟道稚郎子の基盤である和珥氏は、半島進出の元祖、氣長足姫尊（神功皇后）の里であり、大鷦鷯天皇の半島政策に反するものはない。磐之媛の父、葛城襲津彦など武内宿禰一族は軍事的に半島進出を支へており、和珥氏に対立するものでもない。武内宿禰は紀國きのくにの出身であり、紀ノ川流域から、淀川流域への移住もみられ、両者は補完する立場にある。書紀においては、菟道稚郎子は臨終に際して、妹の八田皇女を大鷦鷯尊の後宮にいれるよう遺言している。磐之媛は葛城襲津彦むすめの女、將軍として功を上げたものの、半島で妙な噂を流され、武内宿禰の子とはいへ、問題のある人物であり、その娘を皇后に選ぶことに尋常ならざるところがあった。氣長足姫尊（神功皇后）六十二年（AD262）条に、天皇が葛城襲津彦に新羅を撃たせたが、「新羅人、美女二人を莊飾かざりて、津つに迎へ誘さる。沙至比跪さちひこ、其の美女を受けて、反りて加羅國を伐つ。」結局「反りて我が國を滅す。兄弟、人民、皆爲流沈さすちへぬ。憂へ思ふにえ任しびず。故、以て來り啓まうす。」天皇、大きに怒りたまひて、即ち木羅斤資を遣して、兵衆いくさびとを領ゐて加羅に來集まうつとひて、其の社稷くを復かへしたまふといふ。一に云く、沙至比跪、天皇の怒を知りて、敢へて公に還らず。乃ち自ら竄伏かくる。其の妹、皇宮みかどに幸つかへまうること有り。比跪、密に使人を遣またして、天皇の怒解とけぬるや不なやを問はしむ。妹、乃ち夢に託たくげて言す、『今夜の夢に沙至比跪を見たり。』天皇、大きに怒りて云はく、『比跪、何ぞ敢へて來る。』妹、皇言おほみことを以て報かへりす。比跪、免れざることを知りて、石穴いはつほに入りて死ぬといふ。』とあり、これが葛城襲津彦（沙至比跪）について半島でささやかかれていた噂であった。この妹は磐之媛とみられている。時代的に全く合はないが、このあたりは干支が操作されており、何でもありの状態、この話によれば、葛城襲津彦が問題を起す前に磐之媛は皇宮に入っており、天皇と親しい関係にあったとも推定できる。また、葛城襲津彦は失脚をしている、あ

るいは半島で隠棲しているとも想定され、磐之媛が葛城に帰りたいとも帰れない状況であったかもしれない、また、八田皇女とは対立するが盟友である和珥氏を頼ったことになるのかもしれない。憶測が憶測を呼ぶ、磐之媛の行動である。

磐之媛への断ち難い想ひが記されると同時に、八田皇女に対する執念のようなしつこさが浮き上がってくる。八田皇女は、菟道稚郎子より宮に入ることを託されていたもので、廿二年に妃となることを磐之媛に断られ、卅年に磐之媛の不在中に娶られ、この騒動に至った。大鷦鷯天皇(仁徳天皇)は、そうまでしても、和珥氏との関係を尊重しようと思われた。しかし、武内宿禰の一族との関係も、がっちりとは保たねばならなかった。歴史的に半島情勢を見れば、天皇はこの両豪族を手中におかねば、経営は出来なかったと思はれる。

書紀は古事記と異なり、卅五年(AD347)に、皇后磐之媛命が筒城宮で薨かむじまられたと伝へる。御子の去來穗別尊いさほわけのみことの立皇太子の儀にも立ち会はれることなく、四年が流れ、磐之媛はひっそりと、しかし、皇后として、その生涯を閉じられた。筒木の里に隔離されておられたのかもしれない。武内宿禰一族の将来の漠然たる不安を暗示するものがあつた。去來穗別尊の立皇太子の儀は卅一年(AD343)のことであるが、履中天皇(去來穗別尊)即位前紀に、「時(立皇太子)に年十五歳」とある。十五年前とは仁徳天皇十六年(AD328)であり、それは、二年(AD314)に磐之媛が皇后となられ、十四年後(AD328)にあたり、待ちに待ったはじめての御子の誕生の年となる。実は、その年に、天皇が「桑田玖賀媛を愛まむと欲ふ」と切り出されていたことになる。さぞ、傷つかれたに相違あるまい、嫉妬深い磐之媛といふ噂はどうも怪しい。

二年数ヶ月を経て、葬られたのは乃羅山ならのやまと言ふ。葛城に戻られることも、河内に引き取られることもなかった。延喜諸陵式に「平城坂上墓入磐之媛命、在大和国添上郡、兆城東西一町、南北一町、無守戸」陵墓要覧に「平城坂上陵、奈良県奈良市佐紀町字ヒシアゲ・地」とみへるとされる。佐紀丘陵、佐紀盾列古墳群たてなみにあり、御陵の近くに歌姫越という街道がある。万葉集に、その歌が残されている。

君が行き 日長くなりぬ 山たづね 迎へか行かむ 待ちにか待たむ (万 2-85)

(あなたが行かれて随分とたった。山を捜し尋ねて、迎へに行こうかしら。ひたすら、お待ちすればいいのかしら)

かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し枕きて死なましものを(万2-86)

(このように恋しているのでなければ、高山の岩根を抱いて死んでしまおうものを)

ありつつも君をば待たむうち靡く我が黒髪に霜の置くまでに(万2-87)

(住みついて、あなたのみを待ち、ただ靡く、わたしの黒髪に、白いものがおりるとも)

秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いつへの方に我が恋やまむ(万2-88)

(秋の田の稲穂の上に霧のごとくたちこめる朝霞。いつの間にかどこかへ消えるように、わたしの恋がやんでくれればいいものを)

磐之媛は天皇を心待ちに待っておられた。古事記とも書紀とも異なる情が残されている。天皇を心の底から恋ひ焦がれておられた。しかし、何があったのか？難波に帰ることも、葛城にも戻ることもならず、なくなられ、人々は、歌姫と称してそのころを伝へた。天皇は迎へに来てはおられなかった。古事記や書紀がなんと言おうとも、この歌にころを打たれぬものはあるまい。この御陵の地は、活目入彦五十狹茅天皇(垂仁天皇)の五年(BC25年)に、皇后狹穗姫が兄狹穗彦に従い命を絶たれた地でもある。磐之媛といひ、その一途な想ひが偲ばれる。

1. その大后石之日賣の命、甚多く嫉妬みたまひき。故、天皇の使はせる妾は、宮の中に得臨かず。言立てば、足もあがかに嫉妬みたまひき。ここに天皇、吉備の海部の直の女、名は黒日賣、その容姿端正しと聞こしめして、喚上げて使ひたまひき。然るにその大后の嫉妬を畏みて、本つ國に逃げ下りき。天皇、高臺に坐して、その黒日賣の船出でて海に浮かべるを望み瞻て歌ひたまひしく、

沖方には 小船連らく くろさやの まさづ子我妹 國へ下らす

とうたひたまひき。故、大后この御歌を聞きて、大く忿りまして、人を大浦に遣はして、追いで下りして、歩より追いきりたまひき。ここに天皇、その黒日賣を戀ひたまひて、大后を欺きて曰りたまひしく、「淡道島を見むと欲ふ。」とのりたまひて、幸行でましし時、淡道島に坐して、遙に望んで歌ひたまひしく、

おしてるや 難波の崎よ 出で立ちて 我が國見れば 淡島 自凝島 檳榔の 島も見ゆ
放つ島見ゆ

とうたひたまひき。すなはちその島より傳ひて、吉備の國に幸行でましき。ここに黒日賣、その國の山方の地に大坐しませしめて、大御飯を獻りき。ここに大御羹を煮むとして、其地の菘菜を採む時に、天皇その嬢子の菘採める處に到りまして歌ひたまひしく、

山縣に 蒔ける青菜も 吉備人と 共にし摘めば 楽しくもあるか

とうたひたまひき。天皇上り幸でます時、黒日賣、御歌を獻りて曰ひしく、

倭方に 西風吹き上げて 雲離れ 退き居りとも 我忘れめや

といひき。また歌ひけらく、

倭方に 行くは誰が夫 隠水の 下よ延へつつ 往くは誰が夫

とうたひき。(古事記 仁徳天皇 岩波文庫)

2. 十六年の秋七月の戊寅の朔 (AD328. 07. 01) に、天皇、宮人桑田玖賀媛を以て、近く習へまつる舍人等に示せたまひて曰はく、「朕、是の婦女を愛まむと欲れども、皇后の妬みますに苦りて、合すこと能はずして、多の年経ぬ。何ぞ徒に其の盛年を妨げむや」とのたまふ。仍りて歌を以て問ひて曰はく、

瀨灘會虚赴 於瀨能鳥苔咩鳥 多例擲始難播務

みなそこ おみ をとめ たれやしな
水底ふ 臣の少女を 誰養はむ

是に、播磨國造の祖速待、獨進みて歌して曰さく、

瀨箇始報 破利摩波椰摩智 以播區娜輸 伽之古俱等望 阿例擲始難破務

みかしほ 播磨速待 岩壞す 畏くとも 吾養はむ

即日、玖賀媛を以て速待に賜ふ。明日の夕、速待、玖賀媛が家に詣りぬ。而れども玖賀媛和はず。乃ち強に帷内に近く。時に玖賀媛の曰く、「妾、寡婦にして年を終へむ。何ぞ能く君が妻と爲らむや。」といふ。是に、天皇、速待が志を遂げむと欲して、玖賀媛を以て、速待に副へて、桑田に送り遣はず。則ち玖賀媛、發病して道中に死りぬ。故、今までに玖賀媛の墓有り。(書紀卷十一、仁徳天皇 岩波文庫)

3. これより後時、大后、豊樂したまはむとして、御綱柏を採りに、木の國に幸行でまし間に、天皇、八田の若郎女と婚ひしたまひき。ここに大后、御綱柏を御船に積み盈てて、還り幸でます時、水取司に驅使はえし吉備の國の兒島の仕丁、これ己が國に退るに、難波の大渡に、後れたる倉人女の船に遇ひき。すなはち語りて云ひしく、「天皇は、此日八田の若郎女と婚ひしたまひて、晝夜戯れ遊びますを、もし大后はこの事聞こしめさねかも、靜かに遊び幸行でます」といひき。ここにその倉人女、この語る言を聞きて、すなはち御船に追ひ近づきて、状を具さに、仕丁の言の如く白しき。ここに大后、大く恨み怒りまして、その御船に載せし御綱柏は、悉に海に投げ棄てたまひき。故、其地を號けて御津前と謂ふ。すなはち宮に入りまさずて、その御船を引き避きて、堀江に浜り河の隨に山代に上り幸でましき。この時歌ひたまひしく、

つぎねふや 山代河を 河上り 我が上れば 河の邊に 生ひ立てる 烏草樹を 烏草樹
 の木 其が下に 生ひ立てる 葉廣 五百箇眞椿 其が花の 照り坐し 其が葉の 廣り坐
 すは 大君ろかも

とうたひたまひき。すなはち山代より廻りて、那良の山口に到りまして歌ひたまひしく、

つぎねふや 山代河を 宮上り 我が上れば あをによし 奈良を過ぎ 小楯 倭を過ぎ
 我が見が欲し國は 葛城高宮 吾家のあたり

とうたひきたまひき。かく歌ひて還りたまひて、暫し筒木の韓人、名は奴理能美の家に入りま
 しき。

天皇、太后、山代より幸でましぬと聞こしめして、舍人名は鳥山と謂ふ人を使はして、御歌を送
 りて曰りたまひしく、

山代に い及け鳥山 い及けい及け 吾が愛妻に い及き遇はむかも

とのりたまひき。また續ぎて丸邇の臣口子を遣はして歌ひたまひしく、

御諸の その高城なる 大猪子が原 大猪子が 腹にある 肝向ふ 心をだにか 相思はず
 あらむ

とうたひたまひき。また歌ひたまひしく、

つぎねふ 山代女の 木鋏持ち 打ちし大根 根白の 白腕 枕かずけばこそ 知らず
 とも言はめ

とうたひたまひき。故、この口子の臣、この御歌を白す時、大く雨ふりき。ここにその雨を避け
 ず、前つ殿戸に参伏せば、違ひて後つ戸に出でたまひ、後つ殿戸に参伏せば、違ひて前つ戸に
 出でたまひき。ここに匍匐ひ進み赴きて、庭中に跪きし時、水潦腰に至りき。その臣、紅き
 紐著けし青摺の衣を服たり。故、水潦紅き紐に拂れて、青皆紅き色に變りき。ここに口子の臣

の妹、口日賣、大后に仕え奉れり。故、この口日賣歌ひけらく、

山代の 筒木の宮に 物申す 吾が兄の君は 涙ぐましも

とうたひき。ここに大后、その所由を問ひたまひし時、答へて白しけらく、「僕が兄口子の臣なり。」とまをしき。

ここに口子の臣、またその妹口比賣、また奴理能美、三人議りて、天皇に奏さしめて云ひしく、「大后の幸行でましし所以は、奴理能美の養へる虫、一度は匍ふ虫になり、一度は鼓になり、一度は飛ぶ鳥になりて、三色に變る奇しき虫あり。この虫を看行はしに入りまししにこそ。更に異、心無し。」といひき。かく奏す時に、天皇詔りたまひしく、「然らば吾も奇異しと思ふ。故、見に行かむと欲ふ。」とのりたまひて、大宮より上り幸行でまして、奴理能美の家に入りましし時、その奴理能美、己が養へる三種の虫を大后に獻りき。ここに天皇、その大后の坐せる殿戸に御立ちたまひて、歌ひたまひしく、

つぎねふ 山代女の 木鍬持ち 打ちし大根 さわさわに 汝がいへせこそ 打ち渡すや
がはえなす 来入り参来れ

とうたひたまひき。この天皇と大后と歌ひたまひし六歌は、志都歌の歌返しなり。
天皇、八田の若郎女を戀ひたひて、御歌を賜ひ遣はしたまひき。その歌に曰ひしく、

八田の 一本菅は 子持たず 立ちか荒れなむ あたら菅原 言をこそ 菅原と言はめ
あたら清し女

といひき。ここに八田の若郎女、答へて歌ひたまひしく

八田の 一本菅は 獨居りとも 大君し よしと聞こさば 獨居りとも

とうたひたまひき。故、八田の若郎女の御名代として、八田部を定めたまひき。(古事記 仁徳天皇 岩波文庫)

4. 廿二年の春正月 (AD34. 01) に、天皇、皇后に語りて曰はく、「八田皇女を納れて將に妃にせむ。」とのたまふ。時に皇后、うけゆる聽さず。爰に天皇、うたよみ歌して、皇后に乞ひて曰はく、

于磨臂苔能 多菟屢虚等太氏 于磋由豆流 多曳麼菟餓務珥 奈羅陪氏毛餓望
うまひと 貴人の 立つる言立 ことたて 儲弦 うさゆづる 絶え間継がむに 並べてもかも

皇后、かへしうた答歌して曰したまはく、

虚呂望虚會 赴多弊茂豫耆 瑤用廼虚鳥 那羅陪務耆瀨破 介辭古耆呂介茂
ころも 衣こそ 二重も良き さ夜床を 並べむ君は 畏きろかも

天皇、又歌して曰はく、

於辭氏屢 那珥破能瑳耆能 那羅弭破莽 那羅陪務耆虚層 會能古破阿利鷄梅
おして 押照る 難波の埼の 並び浜 並べむとこそ その子は有りけめ

皇后、答歌して曰したまはく、

那菟務始能 譬務始能虚呂望 赴多弊耆氏 介區瀨夜儂利破 阿珥豫區望阿羅儒
なつむし 夏蚕の 蚕の衣 二重著て 困み宿りは 豈良くもあらず

天皇、又歌して曰はく、

阿佐豆磨能 避介能鳥瑳介鳥 介多那耆珥 瀨致喻區茂能茂 多遇譬氏序豫枳
あさづま 朝孀の 避介の小坂を 片泣きに 道行く者も 偶ひてぞ良き

皇后、遂に聽さじと謂して、故、默して、亦答言したまはず。(書紀卷十一、仁徳天皇 岩波文庫)

5. 卅年の秋九月の乙卯朔乙丑 (AD342. 09. 11) に、皇后、紀國に遊行でまして、熊野岬に到りて、即ち其の處の御綱葉【葉 此れをば箇始婆と云ふ】を取りて、還りませり。是に、天皇、皇后の不在を伺ひて、八田皇女を娶して、宮の中に納れたまふ。時に皇后、難波濟に到りて、天皇、八田皇女を合しつと聞しめして、大きに恨みたまふ。則ち其の採れる御綱葉を海に投れて、著岸りたまはず。故、時人、葉散しし海を號けて、葉濟と曰ふ。爰に天皇、皇后の忿りて著岸りたまはぬことを知しめさず。親ら大津に幸して、皇后の船を待ちたまふ。而し

て歌して曰はく、

那珥波譬苔 須儒赴泥苔羅齊 許辭那豆瀾 曾能赴尼苔羅齊 於朋瀾赴泥苔禮
難波人 鈴船取らせ 腰煩み その船取らせ 大御船取れ

時に皇后、大津に泊りたまはずして、更に引きて 浜 江りて、山背より廻りて倭に向でます。

明日、天皇、舍人鳥山を遣はして、皇后を還したてまつらしむ。乃ち歌して曰はく、

夜莽之呂珥 伊辭鷄苔利夜莽 伊辭鷄之鷄 阿餓茂赴菟摩珥 伊辭枳阿波牟伽茂
山背に い及け鳥山 い及け及け 吾が思ふ妻に い及け会はむかも

皇后、還りたまはずして猶行でます。山背河に至りまして歌して曰はく、

菟藝泥赴 椰莽之呂餓波鳥 箇破能朋利 流餓能朋例麼 箇波區莽珥 多知瑳介踰屢 毛々
多羅儒 椰素麼能紀破 於朋耆瀾呂介茂
つぎねふ 山背河を 河沂り 我が沂れば 河隈に 立ち栄ゆる 百足らず 八十葉の
木は 大君ろかも

即ち那羅山を越えて、葛城を望みて歌して曰はく、

菟藝泥赴 椰莽之呂餓波鳥 瀾椰能朋利 和餓能朋例麼 阿烏珥豫辭 儼羅鳥輸疑 烏陀氏
夜莽苔鳥輸疑 和餓瀾餓朋辭區珥波 箇豆羅紀多伽瀾椰 和藝弊能阿多利
つぎねふ 山背河を 宮沂り 我が沂れば 青丹よし 那羅を過ぎ 小楯 倭を過ぎ
我が見が欲し国は 葛城高宮 我家のあたり

更に山背に還りて、宮室を筒城岡の南に興りて居します。(前掲書)

6. 冬十月の甲申の朔 (AD342. 10. 01) に、^{いくはのおみ おやくちもちのおみ} 的 臣が祖口持臣を遣して皇后を喚したまふ。
【一に云く、和珥臣の祖口子臣といふ】爰に、口持臣、筒城宮に至りて、皇后に謁すと雖も、
黙をりて 答 したまはず。時に口持臣、雪雨に沾れつつ、日夜を経て、皇后の殿の前
に伏して 避らず、是に、口持臣が妹國依媛、皇后に仕へまつる。是の時に適りて、皇后の側
に侍ふ。其の兄雨に沾るるを見て、流涕びて歌して曰く、

椰莽辭呂能 菟々紀能瀾椰珥 茂能莽鳥輸 和餓齊鳥瀾例麼 那瀾多遇摩辭茂
山背の 筒城宮に 物申す 我が兄を見れば 涙ぐましも

時に皇后、國依媛に謂りて曰はく、「何ぞ爾が泣つる。」對へて言す、「今庭に伏して請謁すは、妾が兄なり。雨に沾れつつ避らず。猶伏して謁さむとす。是を以て、泣ち悲ぶらくのみ。時に皇后、謂りて曰はく、「汝が兄に告げて速に還らしめよ。吾は遂に返らじ。」口持、則ち返りて、天皇に復奏す。(前掲書)

7. 十一月の甲寅の朔庚申 (AD342. 11. 07) に、天皇、浮江より山背に幸す。時に桑の枝、水に沿ひて流る。天皇、桑の枝を視して歌して曰はく、

菟怒瑳破赴 以破能臂謎餓 飫朋呂伽珥 枳許瑳怒 于羅愚破能紀 豫屢麻志士枳 箇破能
區莽愚莽 豫呂朋譬喩玖伽茂 于羅愚破能紀

つのはさはふ 磐之媛が おほろかに 聞さぬ 末桑の木 寄るましじき 河の隈隈 寄ろ
ほひ行くかも 末桑の木

明日、乘輿、筒城宮に詣りて、皇后を喚したまふ。皇后、參見ひたまはず。時に天皇、歌して曰はく、

菟藝泥赴 椰摩之呂謎能 許久波茂知 于智辭於朋泥 佐和佐和珥 儼餓伊弊劑虚曾 于知
和多須 椰餓波曳儼須 企以利摩韋區例

つぎねふ 山背女の 木鋏持ち 打ちし大根 さわさわに 汝が言へせこそ 打渡す
弥木榮なす 来入り参来れ

亦歌して曰はく、

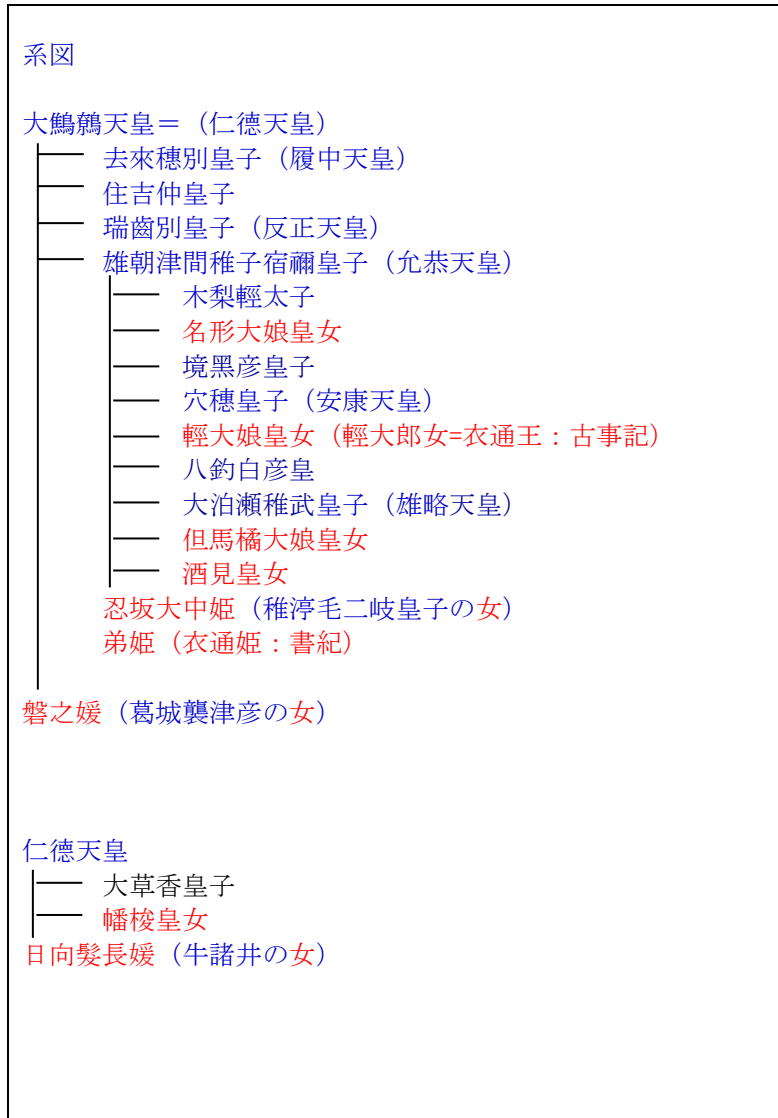
菟藝泥赴 夜莽之呂謎能 許玖波茂知 于智辭於朋泥 泥土漏能 辭漏多娜武枳 摩箇儒鷄
麼虚曾 辭羅儒等茂伊波梅

つぎねふ 山背女の 木鋏持ち 打ちし大根 根白の 白腕 纏かずけばこそ 知らず
とも言はめ

時に皇后、奏さしめたまひて言したまはく、「陛下、八田皇女を納れて妃としたまふ。其れ皇女に副ひて后たらまく欲せじ。」とまうしたまひて、遂に奉見ひたまはず。乃ち車駕、宮に還りたまふ。天皇、是に、皇后の大きに忿りたまふことを恨みたまふ。而して猶し戀ひ思ふこと有す。

(前掲書)

8. 卅五年の夏六月 (AD347.06) に、皇后磐之媛命、筒城宮に薨かむさりましぬ。
卅七年の冬十一月の甲戌の朔乙酉 (AD349.11.12) に、皇后を乃羅山ならのやまに葬はぶりまつる。(前
掲書)



四、木梨輕太子と輕大郎女

一、兄と妹の道ならぬ恋の行方

古事記によれば、木梨輕太子と輕大郎女は母を同じくする兄と妹、母は忍坂のおほなかつひめのみこと、大中津比賣命、父は男淺津間若子宿禰天皇(允恭天皇)である。太子は、皇位継承者の立場にありながら、妹を愛してしまはれた。二人の道ならぬ恋の物語であることは、古事記と日本書紀、ともに同じであるが、両者の描写は驚くほど異なる。かつて、世間を騒がせた事件であるが、内輪の微妙な事件でもあり、うやむやにされていたようであり、編纂時には、それも風化しており、事件に関する歌謡は残されていたが、その歌謡も、他の歌謡をとりこんだり、一部を変へたものであり、必ずしも本人が歌ったものではなかった。それ故に、骨格は変はらないが、かなりの自由度をもって、編纂されることになった。歌物語としてその情を描いた古事記と、歴史の政治事件として評価を下した書紀とは、かほどまで・・・と嘆息するほどの相違をみせている。まずは、古事記に聞いてみよう。

あしひきの 山田を作り 山高み 下樋を走せ 下娉ひに 我が娉ふ妹を 下泣きに
我が泣く妻を 昨夜こそは 安く肌触れ
(足をひきづつて「山にかかる枕詞」、山に田を作るが 山が高く水がないので こつそりと地中に木の管を通して水を盗むように 秘かに妹を訪ね 声を殺して泣く妻を 昨夜こそはと、安らかに肌触れ。)

そういう歌謡に太子と郎女、兄と妹をあてはめ、道ならぬ恋のはじまりを告げる。妹は妻の義でもあり、妹と妻が二重となり、ややこしい。古事記は、それは父の男浅津間若子宿禰天皇が崩御された後、太子が皇位継承者の立場におられたが、まだ即位なされていないときのことであったとする。

笹葉に 打つや霰の たしだしに 率寝てむ後は 人は離ゆとも 愛しと さ寝し
さ寝てば 刈薦の 乱れば乱れ さ寝しさ寝てば

(笹の葉に降る霰の音が「たしだし」とするように 誘ひあって寝たあとでは 人は離れても 愛しいもの そのように寝てしまったのだから。刈り取った菰草の ばらばらとくずればいい「それぞれ離れ離れになる」そのように寝てしまったのだから。)

歌垣でのあけつびろげな男女の交りと別れ、それと、二人の秘められた情事を対比させている。ところがこのことは露見し、噂がひろまるにつれ、太子の皇位継承にかけを落とし、群臣が動揺をはじめた。人が離れる、ばらばらと去ってゆくといふニュアンスが歌からも連想されよう。もし、その噂が本当なら、父母を同じくする者同士の近親相姦であり、ただではすまされぬ、太子については危うい。事が明らかになればなるほど、弟の穴穂(あなほ)の御子に走る臣がふえた。追い込まれた太子は、ついに、石上の武器庫を管轄する物部の大前宿禰の館に逃げ込み助力を求めたが、穴穂の御子の軍勢に囲まれてしまった。

大前 小前宿禰が 金門蔭 かく寄り来ね 雨立ち止めむ
(小前は美称とされる。大前宿禰を金属で補強した門の陰に 出てくるように手招きし雨が止むのを待つように 出てくるのを待とう。)

双方とも武装を固めたといふものの、本気で戦う意志はない。話し合いで決着をつけよう

とした。

宮人の 脚結の小鈴 落ちにきと 宮人とよむ 里人もゆめ

(宮廷の人が袴を膝下で紐で結び鈴を付けているのだが、その鈴が落ちたので、どつと笑い声が響(とよ)んだ。里の人も笑うかもしれないが、ゆめ笑ってはいけない。)

「大前小前の宿禰、手を挙げ膝を打ち、舞ひかなで歌ひ參來」とあり、戦意は全くない。大前宿禰は素手であることを知らしめるように、手を挙げたり下げたりして、舞ひ、奏で、歌って門の前にはらはれた。太子が逃げ込んだ時に鈴を落としたごとく、鈴を落とす仕草に、宮廷の人もどつと笑ったのであろう、その声が響いた。緊迫した場をなごませ、あはせて、降伏の意志をあらはし、里人には騒がぬようにと落ち着かせた。大前宿禰は、太子を捕へ穴穂の御子に差し出した。

天飛む 輕の嬢子 いた泣かば 人知りぬべし 波佐の山の 鳩の 下泣きに泣く

(空を飛ぶ雁が軽と転じたとされる、軽にかかる枕詞。輕の乙女よ 激しく泣くと人に知れてしまうので 波佐山(不明)の鳩のように 秘かに泣きくずれておくれ。)

捕はれた太子の脳裏には郎女との日々が駆け巡った。回想とでもせねばこれらの歌のつじつまはあふまい。はじめの頃は露見せぬかと、はらはらしていたことさえがなつかしい。

天飛む 輕嬢子 したたにも 寄り寝てとほれ 輕嬢子ども

(輕の乙女達に呼びかけたもの。「したたにも」はしつかり、したたかに、ひそかにの意味があり、「とほれ」は行き過ぎる、思ひをかなへるの意味がある。寄り寝ておゆき、思ひはおなじだろう、とほしはしないから)

輕の乙女達はそう軽口をたたくと、結構大胆に寄り寝したものだ。もう、それはかなはない、あの日にはもどれない……。太子は捕へられたといふに、悔い改める心これなく、いまだ、郎女を愛しく思ふ情にふけるのみであった。これでは、救ひの手を出しようもなく、伊予の湯へ流されることとなった。松山の道後温泉のあたりとされる。そのときの太子の情を、

天飛ぶ 鳥も使ひそ 鶴が音の 聞えむ時は 我が名問はさね
(空を飛ぶ鳥を使ってでもあなたの処へゆく 田鶴の鳴き声が聞こえたなら 私じゃないかと問ふてみておくれ。)

とした。なんとしてでも、あなたに逢ひに戻りたい、鳥にも伝言させようものを・・・。
更に、

我が妻はゆめ
王を 島に放らば 船余り い帰り来むぞ 我が暈ゆめ 言をこそ 暈と言はめ

(王を島に流さば、船のひとつやふたつは余つてこよう。必ずや帰り来たらん。私の坐していた暈を齋め、そのまま手をふれるな、いや、本心は、私の妻のこと、身を潔めていておくれ。)

と、これでは、もう、施す薬もない。何があるうと、昔のままに凍結することを望まれた。夫が旅立てば、帰ってくるまで一切をそのままにしておいた。それを變へることは、旅先の夫に異変を及ぼすと恐れられたといふ。ここで古事記は、輕大郎女といふは、実は、「身の光、衣より通りいづればなり」と噂に伝へられる、かの衣通王(衣通郎女)のことであるとされた。ああ、あの嬢子ならば、さもありなむ。うらやましきかな、ひたすら美肌のとりにことなられた太子も、ただものではあるまい、と頷くやからも居たことであろう。その衣通郎女の情は、意外なものであった。

夏草の 相寝の浜 蠣貝で足を切らぬよう 明るくなるまでは返しませんよ
(夏草の茂る 相寝の浜 蠣貝で足を切らぬよう 明るくなるまでは返しませんよ)

とこれまた、夏の夜の浜でのあけつびろげな男女の交歓の歌が用ゐられた。これまで用ゐられた歌からすれば、運命に下泣く悲恋の嬢子を想像させられたが、実に、思ひ切りがよく、芯のつよそうなお方であり、下泣くのは太子であった、と気付かされる。お帰りになれば返すものですか、と太子を力づけるばかりか、もう待ち切れぬ、と伊予に向かって船出された。

君が往ゆき け長くなりぬ 山たづの 迎へを行かむ 待つには待たじ 【ここに山たづと云うは、これ今の造木なり】

(君が往かれてから け「日」、随分と日が過ぎてしまいました。山たづは、葉が対生する造木、迎へにかかる枕詞。対であつてのふたり 迎へにゆきます 待てといはれて 待てるものですか。これは、「君が行き 日長くなりぬ 山たづね 迎へか行かむ 待ちにか待たむ」、磐之媛の歌の変形)

伊予の浜に着いた郎女をお迎へになられて、太子が詠まれた歌には、まず、

隠り國こもくの 泊瀬はつせの山の 大峽おほをには 幡張り立たて さ小峽ををには 幡張り立たて 大峽おほをにし
なかさだめる 思い妻おぼあはれ 槻弓つぐの 臥こやる臥こやりも 梓弓あづき 起たてり起たてりも 後のちも
取り見る 思い妻あはれ

(「隠り國の」は泊瀬にかかる枕詞。峽は丘、峰のこと。大きな峰にも、小さな丘にも幡が張られている。山の神を祭っているのである。「大峽にし なかさだめる」は不明とされ、「通例、大小ならば峰や丘のように、仲良く並ぶ様とされ」心の妻のなんと愛しいことか。槻弓が伏せに伏せられ、梓弓が立てかけおかれ「通例では、伏せておこうが立てかけておこうが、槻弓や梓弓を大事にするように、あなたを大切にするとされる」、ご用済みとなつてしまつたが、あなたの後はなんとかいたします、心の妻のなんと愛しいことか。)

がある。隠り國は、山に囲まれた國、靈魂が死して山に籠もる義があり、泊瀬は、終瀬はてせ、果て瀬、人が果てる場所の義があり「死」を連想させる。奈良県桜井市東部、初瀬川溪谷、長い溪谷で長谷でもある。母の里、忍坂に近い。弓射では弓の弦を鳴らし、邪を祓ふ儀式があり梓弓が用ゐられる。槻弓はケヤキで作られた剛弓であり、太子の地位を連想させる。それが立てかけられたまま、伏せられたままとなつていて、とは流人の太子をいふのである。應神天皇が誕生された時、天より八流の幡が降下したとされ、幡は神を招来するものでもあつた。郎女が伊予へ渡る決心をされたのが、この祭事の「なか…夜中」、大峰の旗に降りられた神に、故郷をでるゆるしを祈られた、と筆者は思ふ。失意の太子のよろこびはいかばかりであつたらうか、もはや流人であるが、できるかぎりのことをしたい、といふ気持ちをこめられた。しかし、「後も取り見る」といふあてはなかつたようである。

隠り國の 泊瀬の河の 上つ瀬に 齋杵を打ち 下つ瀬に 眞杵を打ち 齋杵には 鏡
 を懸け 眞杵には 眞玉を懸け 眞玉如す 吾が思ふ妹 鏡なす 吾が思う妻 有りと
 言はばこそ 家にも行かぬ 國をも思はぬ

(泊瀬の河、水神を祭る。上の瀬に齋杵を打ち 下の瀬に眞杵を打ち 齋杵に鏡を懸け、眞杵に眞玉を懸け 河を清める。その眞玉のごとき私の思ふ妹、鏡のごとき私の思ふ妻、泊瀬に居ると言ふからこそ、家にゆきたい、國をも思ふといふに。「こそくめ」は反語、あなたここに居るのだから、もう泊瀬を偲ぶことはない。これは、「隠口の 泊瀬の河の上つ瀬に 齋杵を打ち 下つ瀬に 眞杵を打ち 齋杵には 鏡を懸け 眞杵には 眞玉を懸け 眞玉なす 我が念ふ妹も 鏡なす 我が念ふ妹も 有りと謂はばこそ 国にも 家にも行かぬ 誰がゆゑか行かむ」の変形。

神事の鏡と玉に妻(妹)を比すとは、不遜と言へばなんと不遜。不敬の極み、とされてしかたあるまい。鏡はその恋心を映すもの、ともされた。やましき曇りなき恋心、いとほしいと思ふ情のみを映す妻。玉は霊、先祖から子孫へとつながる霊、その流れを宿し、産み、育む。その霊を宿す眞玉そのもののような妻。家もなければ國もない、兄もなければ妹もない。すべてのしがらみを捨て去り、「いづくしみあふ」ふたつの情となられたお二人は、「かく歌ひてすなはち共に自ら死にたまひき」とある。木梨の輕の太子と輕大郎女(衣通郎女)はそのようなお二人であった、と古事記は伝へている。

兄と妹が相ひ愛しみあふ、といふことは、活目入彦五十狹茅天皇(垂仁天皇)の皇后の狭穂姫とその兄、狭穂彦王の話にもみえる。古くは、高貴な血を守るといふことで、近親間の交はりが行はれたものの、遺伝上の弊害で、これを禁ずるようになった。しかし、同父母同士でなくば眼をつぶることはあったようで、近親相姦とて一筋縄ではゆかぬところがあった。兄と妹の愛といふのは、血を守るといふ昔のなごりがあり、絆のつよいものがあった。狭穂姫と狭穂彦王の物語は、狭穂彦王の謀反として描かれるが、謀反へと追い込まれた感否めない。二人の愛の深さに、天皇が嫉妬されたとすら思へるからである。皇位がからむと、どうしても、政治事件化され、それにかこつけて、相手を葬り去るといふことになりがちである。

そもそも、男女関係はいつの世もかげを落とすのであるが、有力な豪族が、その女を皇

族の宮へ采女^{うねめ}として、その男を舍人^{をとねり}として入れる時代を迎へると、宮廷内における男女関係がずいぶんと活性化させられたようである。その情^{こころ}を互ひに伝へあふに、歌が用ゐられた。自らが詠んだもののみならず、ある歌に託して、あるいはそれを自分なりに変へ、相手に伝へようとした。豪族の土地の歌、歌垣や労働の歌なども取り込まれ、神事や祭事、歴史と伝承にとらはれず、自らの情^{こころ}を託す歌が求められた。万葉集には四千五百首も集録されており、なかに、禁断とされる兄と妹の恋の歌が、含まれるといふことは、社会規範を維持する上では、問題なくもなかった。古事記が、男と女の愛^{いづく}しみ合ふ情^{こころ}に、なにものにも替えがたいものがあるとする生き方に理解を示したことも、ただことではなかった。平成の世において、もし、皇室にさような恋がもちあがり、それにある種の理解を示さば、如何なることになりましようや。その立場をつらぬくなどは、夢のまた夢、眼をそむけられること疑ひないでしょう。

二、政治スキヤンダルの行方

書紀は古事記の記述を、「一に云はく」と一見解とみなし、全く異なる経緯と評価を与へた。書紀は史書であり、事件には日付が付されねばならず、これが大きな制約になっていた。

それは、雄朝津間稚子宿禰天皇（をまさつまわくのすくねのすめらみこと）（允恭天皇）の二十三年（434年）春三月、古事記とは異なり、天皇はご存命であり、木梨輕皇子を太子、皇位継承者と定められたときのこととした。この話をすすめる前に、書紀は、衣通郎姫は輕大娘皇女ではなく、皇后（おしきかのおほなかつひめ おとひめ）、忍坂大中姫の弟姫として触れねばなるまい。弟は妹と同じ意味であり、皇后の妹で、「容姿絶妙れて比無し。其の艶しき色、衣より徹りて晃れり。是を以て、時の人、號けて衣通郎姫と曰す。」と記し、雄朝津間稚子宿禰天皇が、皇后の嫉妬に悩みつ、愛（いとく）しまれたお方であり、古事記は事実誤認をしているとした。実は、雄朝津間稚子宿禰天皇は、本来天皇となられるお方ではなかった。大鷦鷯天皇（おほささぎのすめらみこと）（仁徳天皇）と磐之媛（いはのひめ）の間の御子といふものの、三人の兄（後の去來穗別天皇、住吉仲皇子、後の瑞齒別天皇）がおられ、歩くことが出来ない病を患ひ、災ひを祓ふために身を破る業を行はれたこともあり、天皇は、身体を自ら傷つける親不孝者はたとえ長く生きようと、皇位を継承することはありえない¹、と言ひ渡しもなされていた。ところが瑞齒別天皇が即位五年（50年）の春正月に、後継者を定めずして崩御され、日向髮長媛との間の大草香皇子とお二人が、急遽、後継候補にのぼってしまった。群臣は、「長にして仁孝」たる雄朝津間稚子宿禰を挙げたのであるが、病のことやかつての親不孝など、その器にあらずと、首を縦にふろうとされず²、空位のまま二年になろうとしていた。これには周囲も困り果てたのであるが、妻の忍坂大中姫が意を決して十二月の半ばに説得にあたられた。お受けなされませとする妻の言葉に、夫は背をむけ、それでも寒風吹き、手にする夫への洗手水が凍るなか、じっと、夫の決心をお待ちになられた。一時間がすぎたころ、寒さに倒れんばかりの妻の姿に気付き、その氣迫に押され、即位を受け入れられたといふ³。古事記のなかの輕大郎女の一途さは、この母の気性を承けておられたのかもしれない。妻には頭のがらぬところがありながら、その妻の弟姫、衣通郎姫に執心されたのは、その肌の色香に、まこと、ただならぬものがあった証しである。ここでは省くが、天皇がこの衣通郎姫をそばに置かれるに至るは容易なことではなかった。書紀は、弟姫（衣通郎姫）の為に藤原部を定めたと、その経緯を書き足し、古事記を訂正した。

話をすすめる前に、もうひとつの出来事をみておきたい。それは、この時代に氏姓うじかばねの乱れがはげしくなっていたことである。このことが政治の乱れをまねいているとして、これを正そうとされた。⁴ 姓かばねによって地位が定まっており、正せば下降する恐れがあり、群臣にとつては受け入れがたいものである。これを断行するために、盟神探湯くがたちが行はれた。熱湯、熱泥に手を入れる、あるいは熱した斧に手を置く、正しい姓であれば害は及ばぬが、偽であれば手は火傷でただれる。神判が下るのであり、ごまかしは通じない。飛鳥の甘檜の丘に探湯瓮くかへを置き、それぞれ木綿のたすきをさせ、手をいれさせた。絶叫が丘に響き、居並ぶもの、恐怖におそわれて退き前へすすめなくなり、「是より後、氏姓自づから定りて、更に詐いつはる人無し。」といふことになった。

先に、有力な豪族が采女や舍人を宮中に入れるということを見た⁵。また、雄朝津間稚子宿禰天皇の父、大鷦鷯天皇（仁徳天皇）や祖父（應神天皇）時代には、半島から多くの渡来人とともに、大陸や半島の文物がもたらされ、衣食住、生活スタイルにおいて変貌がみられたことにも注意しておく必要がある。馬が導入され⁶、豚を飼ふ人々が半島から難波へやってくる⁷、織工を求めて大陸まで捜しに行き⁸、針を使って縫う技術を導入する⁹、鍛冶に携わる漢人を連れ帰る¹⁰、学者を招き文字や制度を学び¹¹、諸國に國史（ふみひと）を置くなど¹²、異国風のものが押し寄せていた。宮廷にとりこまれたものの中には姓を得るものもあり¹³、交易などで富を得るものが、名を騙ることもあったのだろう。難波ではなくにその傾向がはげしく、奈良盆地における旧来の貴族からすれば、眉をひそめるものがあつたとみていいだろう。

雄朝津間稚子宿禰天皇二十三年（434年）春三月、木梨輕皇子を太子、皇位継承者と定められたことはすでにみた。書紀は、木梨輕皇子を「容姿佳麗かほきつやうし、見る者、自づから感めでぬ。」と記し、女性のような美しさ、男装をする宝塚のスターを連想させる容姿の持ち主であつたと記している。そして、「同母妹いろも、輕大娘かるのおほいらつめのひめみぢ、皇女かほよ、亦艷妙かほよし。太子、恆つねに大娘皇女と合みあはせむと念おもす。罪有らむをことを畏りて黙わたあり。然るに感めでたまふ情こころ、既に盛さかりにして、殆ほとほとに死するに至りまさむとす。爰おもほに以爲いたさく、徒いたづらに空しく死しなむよりは、刑有りと雖も、何ぞ忍ぶること得むとおもほす。遂に竊ひそに通たけぬ。乃ち悒いきしほる、懷おもひ少しく息やみぬ。」とあり、太子が罪の意識にさいなまれつつも、妹にのめりこむように思ひ入れ、気狂いして自らを失ふくらいなら、刑を受けるとも思ひを果たしたほうがましとばかりに、秘かに

妹と関係を持たれた、とした。

あしひきの 山田を作り 山高み 下樋を走せ 下婢ひに 我が婿ふ妹を 下泣に 我が泣く妻を 今夜こそは 安く肌触れ

の歌の昨夜を今夜、まだ思ひを達する前の歌としている。太子の描写からすれば、下泣くは太子のほうではなからうかと思はせる。いづれにせよ、秘かにそういうことが始まったとだけ記した。

一年と三カ月がたち、二十四年の夏に異変が起こった。淮南子、天文訓に曰く、「人主の情は、上天に通づ。」夏といふに、天皇のご膳、肉と野菜を温めたスープが凍っていた、いぶかしく思はれ占はせてみると、「身内に相姦あり」とでた。それは、太子と皇女のことでであると告げる人がおり、問ひただしてみると果たしてその通りであった。しかし、太子は皇位継承者であり、加刑することはできない、古事記は分かっている、伊豫に流されたのは妹の軽大娘皇女であると、

大君を 嶋に放り 船余り い還り来むぞ 我が豊齋め 言こそ 豊と言はめ 我が妻を齋め

をあげ、太子がこれ歌ったとしたが、流されたのが太子であってこそ成立する歌の情である。これでは、太子からする大君は天皇となり、意味が支離滅裂となり、古事記を否定したものの、つまづいてしまった。どうしてか、歌の内容を変へることはできなかったとみえる。したがって次に引かれた、

天飛ぶ 軽嬢子 甚泣かば 人知りぬべみ 幡舎の山の 鳩の 下泣きに泣く

も妙なことになってしまった。伊豫に流された妹に 泣き過ぎると 人に知られるだけであり 山鳩のように 秘かに泣きくずれるように、では白々しい。あるいは、そこまでして人に知られるなどは、なんたる身勝手、とひんしゆくをかう。「人知りぬべし」を「み…原因、理由を示す助詞」とするのは、人に知られることになるから、に力点があり、泣きすぎることから、太子の不祥事が伊豫のひとに露見するのを恐れた、と勘ぐられかねぬありさまで、古事記で味わう太子の郎女への愛しい情は吹き飛んでしまっている。

そして、極めつけは、十八年後の四十二年(559年)冬十月、天皇の葬禮が終わったときのことである。太子とは「ひつぎのみこ」、皇位継承者、であり、天皇となられる筆頭におられた。ところが、「太子、暴虐行て、婦女を淫けたまふ。國人誇りまつる。群臣従へまつらず。悉に穴穗皇子に隸きぬ。爰に太子、穴穗皇子を襲はむとして、密に兵を設けたまふ。」、古事記とは全く異なり、太子が今度は婦女を暴行したといふ。

この重大な時期に、何故かようにたはけたことが太子にできたのか、その経緯も婦女の名も記されていない。これを機に、人心は穴穂皇子に移り、太子は秘かに穴穂皇子を襲はんとした。これを察知した穴穂皇子が兵を整へ、群臣がこれに従ったため、太子は大前宿禰の家に隠れ、

宮人の 足結の小鈴 落ちにきと 宮人とよむ 里人もゆめ

のくだりとなる。大前宿禰が太子の助命を穴穂皇子に請ふている間に、「太子、自ら大前宿禰の家に死す。【一に云はく、伊豫國に流しまつる。】と締めくくった。

古事記を読まずに、日本書紀のみを読むとすれば、近親相姦の罪を妹におしつけ、挙句は婦女暴行に及び、弟を亡きものにせんとし、自らを滅ぼした、まことにたわけた太子としかいいようもない。しかし、結末はまだあった。その年の十二月の中旬に、穴穂皇子は即位し、都を石上いそのかみに移し、穴穂宮あなほのみやとした。石上といへば、武器庫を管理する大前宿禰の本拠地である。押し迫った年の暮れに、木梨輕皇子がそこで死んだばかりの地に、かけこむように都を移すとは、普通ではない、しかも、周辺の者は準備をするいとまもない。少なくとも、核となる者達にその準備がすでに出来ていたとするしかあるまい。これは大前宿禰と穴穂皇子が仕組んだ芝居であったやもしれぬ。さような疑ひを抱かせる結末ではあるまいか？

三. その背景

この物語は、衣通郎姫の肌の色香を避けて通ることができない。衣通とは、肌がすすけて見えるうす衣がなくてはならない。古事記は直入に、「身の光、衣より通りいづればなり」とする。さすがに書紀は「容姿絶妙れて比無し。」とぼかすが、重点は、「其の艶しき色、衣より徹りて晃れり」にあった。これには三つのことがある。一つは食が豊かになってきたこと、難波には豚を飼う渡来人が集められた。豚だけではあるまい、天皇が肉と野菜の温スープを食されたとあるごとく、肌に潤を与へる脂質を食するようになったことがあげられよう。禽獣の狩りの話も頻繁にあらはれる。二つめは、化粧品であろう。卑弥呼が魏から得たもののなかに、「真珠と鉛丹」があった。粉末状のもので、銅鏡をみがくものであったが、真珠の粉は長寿薬、解熱薬、鉛丹の粉は化粧用でもあった。鏡は祭祀用具であったが、このころともなれば、化粧用ともなっており、恋心を映すともあり、さまざまな用の方がなされるようになっていた。漢代の神仙思想においては、不老不死にきくと、水銀、ヒ素や鉛などが食されてもいた。馬王堆の漢代の女性のミイラの肌は弾力を保っており、そこから水銀、ヒ素などが検出されている。魏の王朝では、男性が白塗りの化粧をし、美男を誇ったとされ、肌につける化粧品も宮中にはもたらされていたことである。三つめは、衣服。糸の生産、織工技術、裁縫技術が必要であるが、桑を植え蚕を育て糸をつむぐことが行はれており、呉（実際は宋）に織工を求めたこと、百済の王が縫衣工女を渡来させたことなど、應神天皇、仁徳天皇の御代に記されているように、衣服を作る新しい技術が大陸、半島からもたらされ、また、製品が輸入もされたのであろう。そのなかで、薄もの衣、うす絹、が女性の心とともに、男性の心をも捕へていた。

宮中のなかでは、うす絹を纏ふ姫に対して、両端の反応がみられたことである。その妖しくも艶めく衣装を自分もつけてみたい、その姿をひとめでも見たいとはやる情もあれば、はしたない、おぞましいとする情もある。宮中の男どもから「光がてる」と噂される姫である、そのような衣を纏ふ姫が、引つ込み思案で、奥ゆかしく、下泣くなどということ、想像しがたい。男の眼を一身に集めたい、願はくば天皇、或は太子のころを奪ひたいとして不思議あるまい。天皇周辺には豪族の女が采女としてあつめられており、ライバルも多くなっている。衣通姫といふは、その意味では特定の姫ではなく、当時にあられたファッションリーダーのような姫たちの代名詞ではなかったか。そうすれば、弟姫、輕大娘皇女、いづれも衣通姫たりえ、どちらかと一方をえらぶこともなくなる。

應神天皇、仁徳天皇の御代には、大和川や淀川水系での大規模な治水工事が行はれ、農地が増え、道路や港の整備もすすみ¹⁴、交易も活発化し、進出を果たした加羅、新羅、百済を経由して大陸の文物が急速に導入される開国の世でもあった。開国の世にはどうしてもたがが緩む。貴族や豪族のなかでは、開国に熱心な者もおれば、それを苦々しく思う者もいた。この二大勢力の激突を制し、その子（應神天皇）を皇位につけることができたのが神功皇后であり、仁徳天皇に継がれたのであるが、両勢力の間には常に火種があった。また、半島での政策に関しても、百濟寄りが主流とはいへ、新羅寄りの者もあり、宮廷内においては一族と雖も、一枚岩ではなかった。仁徳天皇が崩御されたとき、去來穗別皇子は弟の住吉仲皇子の反乱で奈良に逃れ、大前宿禰などの支持を得て石上に拠を置き、乱を制し磐余^{いはれ}に都を移され、瑞齒別天皇は、河内の丹比^{たぢひ}に都を移され、雄朝津間稚子宿禰天皇は飛鳥に戻すと、めまぐるしく都が移動しており、皇位継承のときに、対立が先鋭化するのが常であった。

その時代に、木梨輕太子が妹^{たは}と通け、皇位の行方があやしくなる事件が起こった。結果的には穴穗皇子が皇位を継承されたのであるが、事が事だけに、真相は明らかにされず、噂のみが広がり、木梨輕太子が伊予に流された^{たは}と聞くものもあれば、いや、自ら命を絶つたと噂する者もあり、殺されたのだとする者もあった。センセーショナルな事件であり、歌にもされ、人々の間にも広まった。古事記や書紀の編纂時には、事実^{たは}はもはや確認できかね、歌をもとに伝承を再現する手法がとられたのであろう。古事記は、木梨輕太子が通けたのは、妹といふより衣通郎女とみ、その魅力のとりことなつたことにより、この事件が起きたとみた。皇位にまさるその魅力、時代の生み出した新たなタイプの女性を選ばれた太子、皇位を失ひ流人となった太子を一途に伊予に追はれた皇女、お互いを愛しみ合ふことを何にも替へがたいとした。この開国の時代が生みだした男と女のありかたとして、古事記は、そういう二人を後の世に伝へむとしたのかもしれない。

しかし、皇位継承をおろそかにするなど、国書にあるまじきことであり、書紀の編纂者達は古事記のままに、この一件を残すことはできなかった。そのために、まずは、衣通郎姫とは弟姫であるといふ伝承を取り上げ、古事記の想定するような皇位と衣通郎女の魅力との選択肢などありえないとした。輕大娘皇女の色香に迷ったといふより、木梨輕皇子自身に問題があるとした。いささかもナルシスト的な美男子であり、憑かれたごとく物狂ひして、妹に手を出しては安定をとりもどすといふ危うさを描いている。それが発覚するに

一年三カ月を要したといふ年月設定には、不自然さはない。書紀の場合には、年月を特定しなければならぬ制約があった。

太子のこの種の罪に関しては、皇位継承者に刑を加へることが出来ないのがしきたりであり、流されたのは軽大娘皇女であり、それが常識といふものである。太子が流されるなど扱いが短絡すぎる、とても云ひたげで、古事記を批判した。しかしながら、歌の情と状況が乖離するといふ、致命的な欠陥をどうしてか、そのままにしていた。

年月を設定するというのは、とてつもない難題である。その結末を見る前に少しく脱線をして、年代問題をみておきたい。古事記は男浅津間若子宿禰天皇が崩御されたのは七八歳としているが、書紀は、珍しく「時に年若干」としている。若干とは多いの義と注される。大兄去來穗別天皇、住吉仲皇子、瑞齒別天皇、雄朝津間稚子宿禰天皇の誕生は、大鷦鷯天皇（仁徳天皇）二年（324年）条に記されており、母の磐之媛命が薨せられたのが347年、453年—347年＝106年。453年—314年＝139年、つまり、百六歳から百三十九歳の間にあたる。弟姫（衣通郎姫）を所望された時が18年、如何に若くしても（418-347）七十一歳を下ることはない。かような老人と衣通郎姫となれば、ひよつとすると同じく老けた衣通郎姫やもしれず、興ざめしようものを。しかし、さような年齢を感じさせることなく、そこそこの相応しい年齢と勝手に読者が想定して読み進めることができるから不思議である。さて、本題に戻ろう。

太子が生きておられ、それ以降なんら記述がない以上、皇位継承者のままであられる。十八年後、天皇崩御の後に皇位継承が問題となった。十八年もたてば、前の罪は、太子が皇位を継承するに決定的な差し障りとはならない。そんな時に、都合よく太子が婦女暴行を行ひ（これだけでは廃位できない）、人心が離れ弟の穴穂皇子に帰すのに脅威を覚え、殺そうと秘かに兵を集めた（誰の兵を動かそうとしたのか？これも廃位できない）、その情報は何抜けになっており、穴穂皇子も兵を集めた。群臣が穴穂皇子へ傾き、太子は大前宿禰を頼って逃げ込んだが、そこで、これも都合よく、自ら死す、と記されている。もし、さように愚かな男なら、自ら死ぬような覚悟はあるまい、殺されたとみるべきであろう。しかし、殺したとなれば、皇位継承者を弑したことになる、その者の罪を問はねばならなくなる。穴穂皇子にとつて、かくも好都合に事が運ぶなど、偶然ではすまされない。直後に石上に遷都されたことをもって、大前宿禰と穴穂皇子の周到な謀はかりごとがあつたと、筆者が考える所以である。書紀の年月の設定が、かような疑惑を招くことは、意図されたことではないかもしれない。そうであるなら、この部分の書紀の年月構成は不用意となるろう。

書紀は、古事記の歌物語の危うさをバッシングした。皇位継承と衣通郎姫をはかりにかけ、衣通郎姫を選ぶような風潮にあこがれを持たれては、将来の太子教育に禍根を残す、国書とするには軽すぎる。近親相姦は近親相姦、そこをしっかりとおさえておかねば、為政者として国政を運営することはできぬ、としたのかもしれない。

四・終はりに

そとほしのいらつめ
衣通郎女とはどんな女性であったのか、書紀と古事記では別人であり、どうしてそんなことになったのか、よみくらべてみた。そして、衣通郎女、うす衣を纏ふ若い女性、当時の最先端のファッションを求める若い皇女の呼称であれば、別人であって成立すると考えた。その魅力は、衣を透した肌の色香にとどまらなかった。

木梨輕太子が皇位継承を捨ててまで衣通郎女を求め、衣通郎女が流人となった太子に逢ひたい一心で、故郷、親も国をも捨てられた。ゆきついたのは、なんのかけりもない、鏡のごとく、眞玉のごとき、お互ひを愛しむ情。いしほ。とうてい凡人の及ぶところではない。かほどの“こころ”が残されていようとは、どういふ時代であったのか？時代の後押しがなければ、生まれ出づることもできまい。

わが国には、すでにこの時代に、そこに辿りついた男女が居られた。一つの高みができれば、それを仰ぐものがあらはれることは、書紀のおそれとほりであろう。皇位継承者の近親相姦に眼をつぶることはできまいが、わが国の歌人に拓いた大きな一歩であった。この伝承をうけて、二人は伊予、松山の姫原の輕之神社に祭られ、山裾の「比翼塚」に塔を並べて、供養をうけておられる。伊予の松山から歌人が生まれるのも、無縁ではあるまい。

1. 雄朝津間稚子宿禰皇子、謝りて曰はく、「我が不天、久しく篤き疾に離りて、歩行くこと能はず。且我既に病を除めむとして、獨り奏言さずして、而も密に身を破りて病を治むれども、猶差ゆること勿し。是に由りて、先皇、責めて曰はく、『汝患病すと雖も、縦に身を破れり。不孝、孰か茲より甚しからむ。其れ長く生くとも、遂に繼業すことを得じ。』」(書紀卷十三、允恭天皇 岩波文庫)

2. 「亦我が兄の二の天皇、我を愚なりとして軽したまふ。群卿の共に知れる所なり。夫れ天下は大きな器なり。帝位は、鴻きなる業なり。且民の父母は、夫れ則ち賢聖の職なり。豈下愚任へむや。更に賢しき王を選びて立てまつるべし。寡人、敢へて當らじ。」宗廟社稷を奉くるは重事なり。寡人、篤き疾して、以て稱ふに足らず。」(前掲書)

3. 元年の冬十有二月(AD712.12)に、妃忍坂大中姫命、群臣の憂へ吟ふに苦みて、親ら洗手を執りて、皇子の前に進む。仍りて啓して曰す、「大王、辭ひたまひて位に即きたまはず。位空しくして、既に年月を經ぬ。群臣百寮、愁へて所爲知らず。願はくは、大王、もろもろの望に従ひたまひて、強に帝位に即きたまへ。」然るに皇子、聽したまはまく欲せずして、背き居して言はず。是に、大中姫命、惶りて、退かむことを知らずして侍ひたまふこと、四五剋を經たり。此の時に當りて、季冬の節にして、風亦烈しく寒し。大中姫の捧げたる鏡の水、溢れて腕に凝れり。寒さに堪へずして死せむとす。皇子、顧みて驚きたまふ。則ち扶け起して謂りて曰はく、「嗣位は、重事なり。輒く就くこと得ず。是を以て、今までに従はず。然るに今群臣の請ふこと、事理灼然なり。何ぞ遂に謝びむや。」(前掲書)

4. 「上古、治ること、人民所を得て、姓名錯ふこと勿し。今朕、踐祚りて、茲に四年。上下相争ひて、百姓安からず。或いは誤りて己が姓を失ふ。或いは故に高き氏を認む。其れ治むるに至らざることは、蓋し是に由りてなり。朕、不賢しと雖も、豈に其の錯へるを正さざらむや。」(前掲書)

5. 「則ち吾子籠愕ちて、己が妹日之媛を獻る。仍りて死罪赦されむと請す。乃ち免したまふ。其れ倭直等、采女を貢ること、蓋し此の時に始まるか。」(書紀卷十二、履中天皇前紀 岩波文庫)

6. 「十五年の秋八月の壬戌の朔丁卯 (AD284. 08. 06) に、百濟王、阿直伎を遣して、良馬二匹を貢る。即ち輕の坂上の厩に養はしむ。因りて阿直伎を以て掌り飼はしむ。故、其の馬養ひ處を號けて、厩坂と曰ふ。」(書紀卷十 應神天皇 岩波文庫)

7. 「十四年の冬十一月 (AD326. 11) に、猪甘津に橋爲す。」(書紀卷十一、仁德天皇 岩波文庫)
猪甘は猪飼、猪飼野とは豚を飼う地の義で百濟系の渡来人が住み着いた。

8. 「卅七年の春二月の戊午の朔 (AD306. 02. 01) に、阿知使主・都加使主を吳に遣して、縫工女を求めしむ。・・・吳の王、是に、工女兄媛・弟媛、吳織、穴織、四の婦女を與ふ。」(書紀卷十 應神天皇 岩波文庫)

9. 「十四年の春二月 (AD283. 02) に、百濟の王、縫衣工女を貢る。眞毛津と曰ふ。是、今の來目衣縫の始祖なり。」(前掲書)

10. 「新羅に詣りて、踏鞴津に次りて、草羅城を抜きて還へる。是の時の倅人等は、今の桑原・佐糜・高宮・忍海、凡て四の邑の漢人等が始祖なり。」(書紀卷九 神功皇后五年 岩波文庫)
踏鞴は鍛冶のことで、これらの漢人捕虜は鍛冶集団

11. 「十六年の春二月 (AD285. 02) に、王仁來り。則ち太子、菟道稚郎子、師としたまふ。諸の典籍を王仁に習ひたまふ。通り達らずといふこと莫し。所謂王仁は、是書首等の始祖なり。」(書紀卷十 應神天皇 岩波文庫)

12. 「四年の秋八月の辛卯の朔戊戌 (AD403. 08. 08) に、始めて之諸國に國史を置く。」(書紀卷十二、履中天皇 岩波文庫)

13. 「廿年の秋九月 (AD289. 09) に、倭漢直の祖、阿知使主、其の子、都加使主、並びに己が黨類十七縣を率て、來歸り。」(書紀卷十 應神天皇 岩波文庫) 東文(倭漢書)七氏は、姓氏録第廿三卷に、「七姓第一は段。これは高向村主、高向史、高向調使、評首、民使主首等の祖なり。次、李姓。これ刑部史の祖なり。次、皂郭姓。これは坂合部首、佐大首等の祖なり。次、

朱姓。これは小市、佐奈宜等の祖なり。次、多姓。これは檜前調使等の祖なり。次、皂姓。これは大和国宇太郡、佐波多村主、長幡部等の祖なり。次、高姓。これは檜前村主の祖なり」とある。

14. 「十一年の夏四月の戊寅の朔甲午 (AD323. 04. 17) に、群臣に詔して曰はく、「今朕、是の國を視れば、郊も澤も曠く遠くして、田圃少く乏し。且河の水横に逝れて、流末駛からず。聊に霖雨に逢へば、海潮逆上りて、巷里船に乗り、道路亦泥になりぬ。故、群臣共に視て、横なる源を決りて海に通せて、逆流を塞ぎて田宅を全くせよ。」冬十月に、宮の北の郊原を掘りて、南の水を引きて西海に入る。因りて其の水を號けて堀江と曰ふ。又將に北の河の澇を防かむとして、茨田堤を築く」(書紀卷十一、仁徳天皇 岩波文庫)

「十三年の秋九月 (AD325. 09) に、始めて茨田屯倉を立つ。因りて春米部を定む。冬十月に、和珥池を造る。◎是の月に、横野堤を築く。」(前掲書)

「十四年の冬十一月 (AD326. 11) に、猪甘津に橋爲す。即ち其の處を號けて、小橋と曰く。是歳、大道を京の中に作る。南の門より直に指して、丹比邑に至る。又大溝を感玖に掘る。乃ち石河の水を引きて、上鈴鹿、下鈴鹿、上豊浦、下豊浦、四處の郊原に潤けて、墾りて四萬餘頃の田を得たり。故、其の處の百姓、寛に饒ひて、凶年之患無し。」(前掲書)


五、 穴穂天皇と中蒂姫 なかしひめ

穴穂天皇（安康天皇）の皇后は注意を要する。皇后が最初に登場するのは、穴穂天皇紀の即位前紀の「十二月の己巳の朔壬午（AD453.12.14）」に、穴穂皇子、即天皇位す。皇后を尊びて皇太后と曰す。1「これは木梨輕太子が「大前宿禰の家に死す」2直後の記述となつてゐるが、この皇后は穴穂天皇の皇后ではなく、父雄朝津間稚子宿禰天皇（允恭天皇）の皇后、忍坂大中姫命のことである。元年春二月（AD454.02）条に「大草香皇子の妻、中蒂姫を取りて、宮中に納れたまふ。因りて妃としたまふ。3」とあるので、皇后の他に中蒂姫を妃に迎へたのかなと思ひかねない。二年の春正月の癸巳の朔己酉（AD455.01.17）に、中蒂姫命を立てて皇后とす。甚に寵みたまふ。初め中蒂姫命、眉輪王を大草香皇子に生れませり。乃ち母に依りて罪を免るること得たり。常に宮中に養したまふ。4」とある中蒂姫が皇后である。

中蒂姫の出自をみると、去來穗別天皇（履中天皇）と次妃、幡梭皇女の子に中磯皇女、がおられ、“なかし”を漢字にすれば中蒂でもあり、両者は同じとなり、中蒂姫は公式には去來穗別天皇の皇女と理解される。子供までいる人妻を皇后に迎へるとは余程魅力のあつた女性と読者は思ふことである。

ところで、その夫の大草香皇子が亡くなつた一件が問題である。政権を奪取した穴穂天皇が真つ先に行ったことは、末弟、大泊瀬皇子（雄略天皇）の婚儀であつた。その相手は大草香皇子の妹、幡梭皇女であつた。大草香皇子は大鷦鷯天皇（仁徳天皇）と日向髪長媛の子であり、去來穗別天皇と同世代であり、書紀の年代では百数十歳でなければならず、その妹となれば老婆のはず、奇怪な縁談と云はねばなるまい。しかし、さような年齢を感じさせないのが書紀の筆法であつた。「願はくば幡梭皇女を得て、大泊瀬皇子に配せむ。5」穴穂天皇の申し出は相手の心底をつくものがあり、大草香皇子は非常に喜んだ。「僕頃重病して、愈ゆること得ず。譬へば物を船に積みて潮を待つ者の如し。然れども死せなむは命なり。何ぞ惜むに足らむ。但、妹、幡梭皇女の孤なるを以て、え易に死なざらくのみ。今、陛下、其の醜きことを嫌ひたまはずして、苜菜の數に満ひたまはむとす。是、甚に大恩なり。何ぞ命の辱きを辭びまうさむ。故、丹心を呈さむとして、私の寶、名は押木珠纒【一に云はく、立纒又云はく、磐木纒】を捧げて、使はされし臣、根使主に附けて、敢へて奉獻る。願はくば、物軽く賤しと雖も、納め

たまひて信契しるしとしたまへ。⁶ 穴穗天皇は大草香皇子の妹に対する将来の不安をみすかしておられた。ところが、仲介をした根使主ねのおみが押木珠縵に目がくらみこれを手に入れるために、「大草香皇子は命を奉らずして、乃ち臣に謂りて曰へり、『其れ同族おやじやからと雖もいふと、豈に吾が妹いもを以て、妻つまとすることを得むや』⁷又、「縵かづらを留めて、己こゝろに入れて獻らず。⁸」と報告したとする。大泊瀬皇子は末弟であり、皇位継承権が最下位で、乱暴者との評判であり、妹を嫁がせることはできない。押木珠縵も献上できないといふ報告である。「是に、天皇、根使主の讒言を信けたまふ。則ち大きに怒りて、兵を起して大草香皇子の家を圍みて、殺しつ。⁹」と根使主の讒言により、大草香皇子は命を落としたとしている。この讒言を天皇が信じて大いに怒ったといふは、大草香皇子の心底を見抜いていた天皇の行為としては釈然としない。根使主にそう言はしめて大草香皇子を討つ大義名分とした、とすれば腑ぶに落ちる。

穴穗天皇紀では、「穴穗天皇は、雄朝津間稚子宿禰天皇（允恭天皇）の第二子なり。【一に云はく、第三子なり。】¹⁰」とする。雄朝津間稚子宿禰天皇紀では三子とし、穴穗天皇紀では二子とした。この細工は、皇位継承権が境黒彦皇子（坂合黒彦皇子）に優先することを印象づけるためであろう。穴穗天皇が兄を押しつけて皇位につく大義を明らかにする過程をこれにより省くことができた。また、木梨輕皇子が新たに淫行を重ね、物部大前宿禰の宅に逃げ込み、そこで自ら命を絶ったというストーリーを導入し、木梨輕皇子失脚の直接の原因を近親相姦とする古事記の伝承を変えたことも作為的であり、そのことはすでにみたとおりである。つまり、木梨輕皇子の近親相姦の非を唱えて追い込んだものの、近親相姦で皇位継承権を奪ったものではなく、木梨輕皇子が自殺したため、第二子である穴穗皇子が皇位を継承したといふ筋立てをしたことになる。どうにもすつきりしないもやもやとした筋立てである。

こうした中に思はぬ記述を残し、事態を慎重に眺めることを要請するのも書紀の筆法である。雄略天皇紀において、穴穗天皇の皇后を「去來穗別天皇の女みむすめ、中蒂姫皇女と曰す。更の名は、長田大娘皇女ながたのおほいらつめのひめみこ。大鷦鷯天皇の子おほささぎのすめらみこと、大草香皇子、長田皇女を娶まきて、眉輪王を生めり。後に、穴穗天皇、根臣ねのおみの讒よこしまうすことを用ひて、大草香皇子を殺して、中蒂姫皇女を立てて皇后としたまふ。¹¹」と記した。中蒂姫の又の名を「長田大娘皇女」とする。これは、名形大娘皇女と一致する。つまり、穴穗天皇の姉、父母を同じくする姉である。

公式には、去來穗別天皇の皇女としているが、穴穗天皇が、実姉を皇后にしたと耳打ちしていることになる。書紀のどんでん返しの手法である。すでにみたごとく、大草香皇子は相当の高齢であり、穴穗皇子は恐らく姉の名形大娘皇女を愛しておられ、老齢の大草香皇子に嫁がされたことを悔やんでおられたと想像できる。幼い頃より姉を慕って育ってこられたものかもしれない。押木珠縵は新羅製の金の枝と珠がちりばめられた王冠であり、大草香皇子の家来に難波吉師、日香蛟父子がおり、彼等は半島との交流に従事しており、この親戚筋をしっかりと取り込むための婚姻であったろう。穴穗皇子は時が来れば、あの老人から姉を取り返そうと機会を窺っておられた。その機会は必ずや父の死後にやってくる、その時、自分が皇位を継承すれば可能になる。長兄、木梨輕太子を追い詰め、覇気に欠ける次兄境黑彦皇子（坂合黑彦皇子）を抑へて即位にこぎつけた最初の仕事で、姉の奪還であった。そしてそれは、成功したかにみえた。

この姉と弟にいかなる愛が交わされていたのか一切記されていない。しかし、秘められた強い想ひなくしては、このような行動が起こることはない。秘められたままであればよかつたのかもしれないが、妻とし、皇后とするとなれば政治問題化する。兄を近親相姦で追い詰め、自ら同じ轍を踏む、醜聞、スキャンダルであり、放置できるものではない。しかし、誰もが想像できない形で結末が訪れた。

穴穗天皇紀は、穴穗天皇が「眉輪王の爲に殺せまつられたまひぬ。12」とそつげなく簡略に顛末を述べた。古事記は、「その大后の先の子、目弱の王、これ年七歳なりき。この王、その時に當たりてその殿の下に遊べり。ここに、天皇、其の少き王の殿の下に遊べるを知らしめさずて、詔りたまひしく、『吾は恆に思ふ所有り。何ぞといへば、汝の子、目弱の王、人と成りし時、吾がその父王を殺せしを知りなば、還りて邪き心あらむとするか』とのりたまひき。ここにその殿の下に遊べる目弱の王、この言を聞き取りて、すなはち竊かに天皇の御寝しませるを伺ひて、その傍の大刀を取りて、すなはちその天皇の頸を打ち斬りて、都夫良意富美の家に逃げ入りき。13」と記した。大草香皇子と中蒂姫（＝長田大娘皇女＝名形大娘皇女）の子、眉輪王が七歳にして穴穗天皇を弑する前代未聞の事件が起こつたとする。七歳の目を病んだ童子の単独犯行といふは、神話ならともかく史書にはそぐはない。

雄略天皇紀は、穴穗天皇の妻への言葉として、「吾妹【妻を稱ひて妹とすること】は、蓋し、古の俗か【汝、親しく昵しと雖も、朕、眉輪王を畏る。14】と言つたとする。老齡

の夫を謀殺し、スキヤンダルをものともせず、姉を皇后にした穴穂天皇、それほどまでに一途につつ走った弟に、姉は人間の性のすぎまじさ、おぞましさ、秘かな喜びと底のない不安と罪悪感、おののきを覚えておられたに違ひあるまい。二人でいる時のみ、弟の一途さを、定めと睦まじく受け入れられていたのかもしれない。一方、「眉輪王、幼年くして樓の下に遊戯びて、悉に所談を聞きつ。既にして穴穂天皇、皇后の膝に枕したまひて、晝酔ひて眠臥したまへり。是に、眉輪王、其の熟睡ませるを伺ひて、刺し殺せまつりつ。15」、とあらば、我が子の望みにも抗えず、結果的に天皇を殺す手助けにも手を染めたことになる。悪夢のごとき現実に翻弄され、行方を喪失した魂が発狂したとしても不思議あるまい。しかし、事態の推移を深刻に捉へ、果敢に行動を起こした皇子がおられた。

穴穂天皇が弑された「是の日に、大舍人【姓字を闕せり。】驟りて天皇に言して曰す、「穴穂天皇は、眉輪王の爲に殺せられたまひぬ。」天皇、大きに驚きたまひて、即ち兄等を猜ひたまひて、甲を被り刀を帯きて、兵を率て自ら將となり、八鈞白彦皇子を逼め問ひたまふ。皇子、其の害らむとすることを見て、嘿坐しまして語はず。天皇、乃ち刀を抜きて斬りたまひつ。16」と雄略天皇即位前紀は記している。即位前に大泊瀬皇子をすでに天皇と記すのも異例、それはすでに天皇の行動の呈をなすと評価しての贅辞とみるべきであろう。穴穂天皇と姉の近親相姦の問題、それを童子と皇后を操り、追い詰め、自らは口を閉ざし手を下さず、童子を補佐する形で実権を握ろうとし、いづれ穴穂天皇と姉の近親相姦を正したと正当化し、童子も天皇を弑したとして葬り去るのである。大泊瀬皇子が、即時に武装し、事を起こす可能性のある八鈞白彦皇子に先手をとり、即刻斬つたことは絶大の効果があった。「坂合黒彦皇子を逼め問ひたまふ。皇子、亦、害はむとすること知りて、嘿坐しまして語はず。天皇、忿怒彌盛なり。乃ち復并せて眉輪王を殺さむと欲すが爲に、所由を案へ効ひたまふ。眉輪王の曰す、「臣、元より、天位を求ぐにあらず。唯、父の仇を報ゆるくのみ。」坂合黒彦皇子、深く疑はるることを恐りて、竊に眉輪王に語る。遂に共に間を得て、出でて圓大臣の宅に逃げ入る。17」大泊瀬皇子の睨んだ通り、眉輪王にも坂合黒彦皇子にも自ら事を起こす度胸は無く、逃げ込んだ先があった。圓大臣の宅といふ。

武内宿禰、葛城襲津彦、玉田宿禰と続く葛城の名門である。天皇も使者をたて、圓大臣も使者を通じて心情を伝へた。臣が事あれば王室に逃げ込むことはあったが、君王が臣の舎に隠れるといふは見たことがない。しかし、今、まさに、坂合黒彦皇子と眉輪王が深く

私の心をたよってこられた。どうしてひそかに送り届けることなどできましよう。圓大臣は大泊瀬皇子の意図を見誤っていた。使者の言上に対して、大泊瀬皇子は兵力を増強して圓大臣の宅を囲み、ためらふことなく、旧勢力の象徴ともいふべき葛城の名門にも鉄槌を加える決断をしておられた。

「臣、戮せらるるも、敢へて命を聽ること莫けむ。古の人、云へること有り。

匹夫の志も、奪ふべきこと難しといへるは、方に臣に屬れり。伏して願はくは、大王、臣が女、韓媛と葛城の宅七區とを奉獻りて、罪を贖はむことを請らむ。18」

圓大臣は、論語、子罕篇、「三軍、帥を奪ふ可し。匹夫、志を奪ふ可らざるなり（天子の三軍の元帥を変えることはできるが、匹夫といえど、その志を奪うことはできない）」を引いて、助命を願ったが、大泊瀬皇子は「許したまはずして、火を縦けて宅を燔きたまふ。是に、大臣と、黒彦皇子と眉輪王と、俱に燔き死されぬ。19」とある。大泊瀬皇子は、一切を焼き殺し肅正し、穴穗天皇と姉との近親相姦の一件も封印した。その肅正は、去來穗別天皇（履中天皇）の一人子、市邊押磐皇子にも及んだ。かくて、穴穗天皇の皇后は、去來穗別天皇の女、中蒂姫とされた、一種の危機管理である。

古事記には、去來穗別天皇が幡梭皇女を次妃として中磯皇女（中蒂姫）を生んだという記述はない。古事記では幡梭皇女とは「日向の諸縣の君牛諸の女、髮長比賣を娶して生みませる御子、波多毘能大郎子、亦の名は大日下の王。次に波多毘能若郎女、亦の名は長日比賣の命、亦の名は若日下部の命」とある波多毘能若郎女（若日下部命）のみであり、大長谷若建命（大泊瀬皇子）の妻となり子が無かったと記されている。書紀では、大草香皇子の妹、幡梭皇女の他に、去來穗別天皇が次妃とした幡梭皇女を導入した。この幡梭皇女の出自が記されておらず、その子の中磯皇女（中蒂姫）を大草香皇子が妻としたとする。異母兄弟（去來穗別天皇）の子（我が子と同年代）を妻としたことになり、非常に不自然なことになる。また、書紀のみを読む人は、幡梭皇女を大草香皇子の妹、幡梭皇女、去來穗別天皇の皇后となった草香幡梭皇女と思ふ。つまり、大草香皇子が妹の子を妻にしたと読み進めて不思議はない。そこに、大泊瀬皇子の妻となる幡梭皇女が現れ、頭が混乱する。このややこしさは解消されることがなく、即位の元年条に「草香幡梭皇女を立てて皇后とす。【更の名は橘姫皇女】」としており、去來穗別天皇の皇后となった草香幡梭皇女と同一となり、幡梭皇女は謎に包まれる。これよりは、古事記が、「穴穗御子は、大日下王を殺して、その嫡妻、長田大郎女を取り持ち来て、皇后としたまひき。」としたこと、大草香皇子の妻は長田大娘皇女であり、大草香皇子の妹、幡梭皇女（若日下部命）には子が無く、去來穗別天皇

の次妃で中磯皇女を生んだとする幡梭皇女などは居ないとしている方がすっきりしている。

「更の名は、なかたのおほいらつめのひめみこ長田大娘皇女」の一句が筆者に語りかける顛末である。

それにしても、夫、大草香皇子を無実の罪で殺され、弟であり夫となった穴穗天皇を我が子が殺すことを黙認し、我が子、眉輪王を焼き殺された長田大娘皇女の愛と苦渋、苦悩、悲嘆は、あまりにむごく、言葉すら残されていない。記すことがはばかられたのかもしれない。木梨輕太子と輕大郎女の運命と対極をなし、救いのない地獄を見る思ひがする。

木梨輕太子と輕大郎女が恋しあつたことが大きく取り沙汰されたその陰で、秘かに穴穗皇子は姉の長田大娘皇女を恋しておられた。幼き日々はこの姉と弟が心を通い合わせて寄り添っておられた姿に想いを致し、ご冥福を祈るばかりである。

- 1、書紀卷十三、安康天皇 岩波文庫
- 2、前掲書
- 3、前掲書
- 4、前掲書
- 5、前掲書
- 6、前掲書
- 7、前掲書
- 8、前掲書
- 9、前掲書
- 10、前掲書
- 11、書紀卷十四、雄略天皇 岩波文庫
- 12、書紀卷十三、安康天皇 岩波文庫
- 13、古事記、安康天皇 岩波文庫
- 14、書紀卷十四、雄略天皇 岩波文庫
- 15、前掲書
- 16、前掲書
- 17、前掲書
- 18、前掲書
- 19、前掲書

年代については、額面通りには、受け入れられていない。それぞれの天皇、皇后の時代のこととして記されていると理解いただければ幸いである。